

Title	戦時下の平和の祭典 - 幻の東京オリンピックと極東スポーツ界 -
Author(s)	高嶋, 航
Citation	京都大学文学部研究紀要 = Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University (2010), 49: 25-72
Issue Date	2010-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/108392">http://hdl.handle.net/2433/108392</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 戦時下の平和の祭典

## —幻の東京オリンピックと極東スポーツ界—

高 嶋 航

### はじめに

1939年9月1日、ヨーロッパで第二次世界大戦の火ぶたが切られたまさにその日、「満洲国」（以下、「」は省略）の国都新京で、日本、満洲国、「中華<sup>1</sup>」の3か国による日満華交驩競技大会（以下、日満華大会）が幕を開けた。

かつて極東では、日本、中国、フィリピンを中心に極東選手権競技大会（以下、極東大会）が開催されていた<sup>2</sup>。1913年にマニラで始まった極東大会は、1934年の第10回大会で21年の歴史に幕を下ろした。その直接的原因は、満洲国を極東大会に参加させようとした日本と、それを拒否した中国が対立した、いわゆる満洲国参加問題であった。すでにこの当時、国際スポーツの世界は国際政治と分かちがたく結びついていたが、スポーツ界はなおもスポーツと政治は別だという論理を堅持していた。満洲国参加問題という形で、国家間の対立がスポーツの世界に持ちこまれたとき、スポーツ界はそれを解決することができず、日本はフィリピンとともに新たな組織、東洋体育協会の成立を宣言して、極東大会そのものを解消するしか解決の途がなかった<sup>3</sup>。

本稿は、前稿で扱った極東大会の解散以降の極東スポーツ界の軌跡を跡づけることを目的とする。この間、スポーツ界をめぐる状況には大きな変化が生じていた。東京オリンピックの開催権獲得と返上、日中戦争の勃発がその主なものである。日満華大

---

1 「中華」と括弧で表記する場合は、具体的には中華民国臨時政府を指す。本稿ではしばしば華北という語を同じ意味で用いる。

2 拙稿「極東選手権競技大会とYMCA」夫馬進編『中国東アジア外交交流史』京都大学学術出版会、2007年。

3 拙稿「満洲国」の誕生と極東スポーツ界の再編』『京都大学文学部研究紀要』第47号、2008年3月。

会はこうした新しい極東の情勢に対してスポーツ界が提出した一つの回答であった。

第一章では、極東大会にかわる競技会、東洋選手権競技大会（以下、東洋大会）を取り上げる。東洋大会は1938年に日本で開催される予定であったが、1943年に東洋体育協会が改組されるまで、一度も開催されずにおわった。その原因は何だったのか。日本、満洲国、フィリピン、中国の間で繰り広げられた東洋大会をめぐる交渉を検討してみると、日本とフィリピンの対立が浮かび上がってくる。両者の対立は極東大会解散劇の後遺症とでもいうべきものであった。そこで、日比間の交渉を分析の中心に据え、日本スポーツ界内部の対立、東京オリンピック、日中戦争などの諸要因が日比間の交渉にいかなる影響を与えたのかを論じる。

第二章では、東洋大会が実質的に棚上げされたあと、日満華大会の構想がどこからどのように出てきたのか、そして日満華大会の実態はいかなるものであったかを考察する。これまで日満華大会は、日本においても中国においても研究者の関心を引くことはなかった。一つの原因は、日満華大会が満洲国で開催されたからである。もう一つの原因は、研究視角の欠如、具体的にいえば、戦時下スポーツの看過と、スポーツの一国史的理解である。まず後者についていえば、日満華大会は極東大会解散後、極東スポーツ界ではじめて実施された国際的総合競技会であり、1940年の東亜競技大会を準備した大会であった。日満華大会は東洋大会と全く別の形式を取るようになったが、それは極東大会解散以後の国際情勢およびスポーツ界の変化を反映した結果であり、戦時下の国際スポーツの新しいあり方を予示するものであったという点で重要な大会であった。

前者、すなわち戦時下のスポーツを考察するのが第三章である。戦時下のスポーツはこれまで学界であまり触れられてこなかったが、最近になって『幻の東京オリンピックとその時代』が刊行されたことを契機に、新たな展開が生まれるものと期待される<sup>4</sup>。『幻の東京オリンピックとその時代』所収の論文はいずれも今後の研究の出発点となる重要なものばかりだが、ただ一つ残念なのは、各論者の関心がほぼ日本国内に止まり、極東全体を射程においた議論がみられないことである。本章では、日満華大会

---

4 坂上康博、高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代：戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社、2009年。

の参加国である日本、満洲国、「中華」の状況を比較検討し、とくに中国大陸の日本人に注目して、彼らこそが日満華大会をもっとも必要とし、もっとも積極的であったことを明らかにする。それは戦時下スポーツのあり方から必然的に導き出された結果であった。

## 第一章 幻の東洋選手権競技大会

### 第一節 極東選手権競技大会のトラウマ

拙稿「『満洲国』の誕生と極東スポーツ界の再編」で明らかにしたように、極東大会は日本の強引な手法によって解散させられたが、この手続きの合法性については、満洲国参加に反対していた中国のみならず、フィリピンや満洲国からも疑問視された<sup>5</sup>。東洋体育協会はその設立当初から著しく権威を欠いており、このことが東洋体育協会のその後の運命を決定づけたのである。極東大会解散劇はまた、日本と満洲国の両体育協会の絶交を招くという皮肉な結果をもたらした。大日本体育協会は、そもそも満洲国を国際スポーツ界にデビューさせるために東洋大会をしつらえたのに、肝心の満洲国体育協会が東洋大会への参加を拒否したのである。政治的にますます結びつきを深めていた両国が、スポーツの世界で、しかも日本人同士で、いつまでもいがみあっているわけにはいかない。ほどなくして、このねじれを解消しようという試みが始まった。

6月26日、大日本体育協会顧問の副島道正が満洲国を訪問した。その目的は「二週間位の予定で息子の史蹟研究のお伴」をするためであったが、当然ながら日満両体育協会の関係修復が期待されており、この点について尋ねられた副島は、「全くさうした使命を持つてゐない」が、「若しあちらで何か話しがあれば個人として私見を述べたいと思つてゐる」と記者に話した<sup>6</sup>。6月29日、早稲田大学体育会長山本忠興が満洲国入りした。表向きは大連に遠征中の早大野球部と落ち合うことが目的であったが、「関東軍の招聘をかねて居た」らしく、新京では満洲国の日本人要人や関東軍の参謀たちが

---

5 『読売新聞』1934年6月8日。

6 『満洲日報』1934年6月27日。

多く彼のもとを訪れたという<sup>7</sup>。ともかく、彼自身は「伝へられてゐるやうな東洋体育協会の成立の為、満洲国体育協会との協議など全く予定して居りません」と、これまた東洋体育協会との関係を否定した。しかし一方で「あちらに行けばさういふ話も出る事と思ひますが、その時は誠心誠意その協議に努力するつもりです」と、すでに話し合いの心づもりができてきているかのような口ぶりを見せた<sup>8</sup>。山本は大日本体育協会の委託を受け、満洲国を極東大会に参加させるべく奔走し、大日本体育協会と満洲国体育協会が対立するや、右翼団体や軍部とともに満洲国に肩入れした。両者の関係修復を斡旋できる人物は山本を措いて他にはなかった。

彼らの渡満はおそらく偶然ではない。先の極東大会参加をめぐる騒動で失態を演じただけに、まずは非公式な形式で互いの腹を探り合おうとしたのである。果たして、山本、副島の兩人は新京で満洲国体育協会会長鄭孝胥（國務總理）、副会長西山政猪（文教司長）らと協議をおこない、満洲国体育協会は「従来行き掛りを捨て第一回東洋選手権大会に欣然参加することになつた<sup>9</sup>。」この決定を受け、満洲国体育協会はフィリピンに対して東洋体育協会設立の趣旨等に関する問い合わせを行った。7月12日、フィリピンアマチュア競技連盟（以下、PAAF）会長バルガス（Jorge B. Vargas）は満洲国体育協会に東洋体育協会への加入を要請する電報を打ったが、満洲国体育協会は日本より先にフィリピンからの申し出を受けることに躊躇し、すぐには返事をしなかった<sup>10</sup>。

このとき満洲国体育協会は改組へ向けた準備のさなかにあつた。7月19日、満洲国体育協会は地方支部と種目別競技団体からなる新しい組織に衣替えし、「大満洲帝国体育連盟」と改称した<sup>11</sup>。8月13日、大満洲国体育連盟は東洋体育協会への加入の件につ

7 山本忠興博士伝記刊行会編『山本忠興伝』同書刊行会、1953年、137頁。関東軍が極東大会満洲国参加問題に関与したことについては、拙稿「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』第93巻第1号、2010年1月、を参照。

8 『東京朝日新聞』1934年6月28日。このほか、日本陸上競技連盟副会長春日弘が7月3日に大連入りし、満洲国体育協会の関係者との問題に関して「大いに論じて見たい」と述べた（『満洲日報』1934年7月4日）。

9 『東京朝日新聞』1934年7月10日。

10 『東京朝日新聞』1934年7月14日、『盛京時報』1934年7月14日、『満洲日報』1934年7月15日。

11 『盛京時報』1934年7月18日、満洲帝国政府編『満洲建国十年史』原書房、1969年、878頁。

いて協議し<sup>12</sup>、日本との関係改善を図るため、飯沢重一、難波経一の両理事を日本に派遣することにした<sup>13</sup>。2人は27日に開催された大日本体育協会専務理事会に出席し、「春以来の確執はこゝに全く氷解して過去の問題は一切水に流し相提携して将来に向つて邁進する事に一致を見た」のである<sup>14</sup>。そして9月にはさっそく満洲国蹴球団が来日して日満間のスポーツ交流が再開した<sup>15</sup>。大満洲国体育連盟は10月に東洋体育協会加盟の正式手続書を大日本体育協会に提出し、11月22日にフィリピン側の承認を得た。かくて懸案の満洲国参加問題は落ち着を見たのである<sup>16</sup>。

1934年12月14日、アメリカから帰国の途次に日本に立ち寄ったバルガスとエストラダ（Januario Estrada）を迎え、第2回東洋体育協会総会が開催された<sup>17</sup>。満洲国から飯沢重一、日本から平沼亮三、郷隆、渋谷寿光、松沢一鶴、安部輝太郎が出席し、中華民国に加盟を懇請すること、東洋体育協会成立を東洋諸国およびIOC委員長ラツール（Henri de Baillet-Latour）に通告すること、明年4月か5月に東京で総会を開くこと等を決定した。東洋体育協会副会長としてバルガスは次のような談話を発表している。

極東スポーツの久遠の発展を目指して設立された東洋体育協会は、将来如何なる事件に遭遇しても、飽くまで明朗なる態度を持して東洋諸国の親善を計らなければならない。スポーツはスポーツ独自の立場から、何等他の事情に左右せられないやうに力めると同時に、他面、国際的悪感情などをも、この朗らかなスポーツによつて和らげ大きな意味における東洋の体育協会に盛り上げたいものである。極東スポーツの発展を冀ふ所以のものは、これによつて醸成せられんとする偽りなき東洋の平和である。これが新しい東洋体育協会の使命であることを強調したい<sup>18</sup>。

バルガスは依然として、スポーツが政治から独立すべきことをうたいあげる一方、ス

---

12 『盛京時報』1934年8月12日。

13 『盛京時報』1934年8月14日。

14 『東京朝日新聞』1934年8月28日。

15 『東京朝日新聞』1934年9月11日。

16 『東京朝日新聞』1934年10月19日、11月23日。

17 『東京朝日新聞』1934年12月15日。

18 『東京朝日新聞』1934年12月15日。

ポーツを通じて「東洋の平和」を実現することが東洋体育協会の使命であることを強調した。軍事力のないフィリピンは、アメリカからの独立を目前にして、「東洋の平和」を渴望していた。しかるに、日本は「東洋の平和」を乱し、極東大会を破壊した。バルガスの言葉には、日本のこうした行為を批判し、牽制する意図があったであろう<sup>19</sup>。

読売新聞記者星野龍猪は、この総会についてコメントし、三国代表は国際オリンピックを模範としているようだが、「東洋のみの持つ美点をも生か」すべきだとする<sup>20</sup>。具体的には、オリンピックに採用されていない庭球、蹴球、野球、排球を取り入れることであった<sup>21</sup>。また星野は、日本のスポーツ界が「満洲国参加問題を契機としてはつきりとしたイデオロギーを植つけ得たはずであり、同時に東洋における自己の地位を明確に認識したはずである」という。では先ず何をしなければならないかという、「中華民国の加盟勧誘」であり、「日比両国が相俱に儀礼を尽してその衝に当」たることを希望した<sup>22</sup>。こうした主張は、後の日滿華大会における露骨な日本盟主論と比べると、「イデオロギー」といい「東洋における自己の地位」といっても、ひじょうに控えめな内容だといえる。

第3回東洋体育協会総会は1935年4月22日に開催され、フィリピンからPAAFのイラナン名誉主事 (Regino Ylanan)、大満洲国体育連盟から久保田完三、蔡彪、日本から渋谷寿光、松沢一鶴、さらに来日中のシャム社会教育省体育課長サワスチ・レクヤナンダがオブザーバーとして出席し、憲法および大会の詳細が話し合われた<sup>23</sup>。

第3回東洋体育協会総会について、星野龍猪は3つの問題点を指摘した。第一に、

19 *Manila Daily Bulletin*, May 23, 1934.

20 星野龍猪「東洋体協の将来」『読売新聞』1934年12月18日。

21 これらはいずれも極東大会の正式種目であった。なお、テニスは1924年までオリンピック種目であった。サッカーは1932年のロサンゼルスオリンピックで採用されなかったが、その前後はずっとオリンピック種目である。野球は1936年のベルリンオリンピックでデモンストレーションとして実施された。バレーボールがオリンピックに登場するのは1964年の東京オリンピックを待たねばならない。

22 日本のスポーツ界は、中国の東洋体育協会加盟に関して非常に楽観的であった。たとえば平沼亮三は、「近き将来必ず我等の傘下に来り加はることを信じて疑はない」と語っている（平沼亮三「スポーツ界に望む」『読売新聞』1935年1月1日）。

23 『東京朝日新聞』1935年4月23日。「東洋」の範囲は日本、満洲国、中華民国、フィリピン、インド、シャム、ベルシャ、蘭印、仏印、ビルマ、トルコ、アフガニスタン、英領海峡植民地、とある。



東洋体育協会は IOC 会長ラッセルに新組織の成立を報告したが、ラッセルは「旧極東体育協同様の協賛は目下のところ与へ得ない、これについては来年ベルリンで日、比、支三国代表と更めて協議しよう」という返事をした。ラッセルが東洋大会を積極的に支持しなかったのは、一説では「ラッセル伯への支那のデマ的提訴が効果を生じた」結果であった<sup>24</sup>。とくに星野が問題だと考えたのは、中国が IOC オスロ会議で東洋体育協会を否認し極東体育協会の存続を主張した時、日本側は対抗措置をとらず、そのために満洲国の IOC 加盟問題がうやむやになってしまったことである<sup>25</sup>。第二に、前回の東洋体育協会総会で東洋体育協会の設立を東洋諸国に報告し、中国には参加の勧誘をすることが決まっていたが、いまだに何らの措置も取られていなかった。第三に、この時期ちょうど蘭印政府代表が東京に来ていたが、東洋体育協会として何の呼びかけもおこなわなかった。つまり、大日本体育協会はどう見ても東洋大会に対して熱心ではなかったのである。一つの原因は、星野も指摘するように、大日本体育協会が自身の改造問題に直面していたことである。日本のスポーツ界を二分するに至ったこの問題は 1935 年 1 月末まで決着がもつれこんだ<sup>26</sup>。もう一つの原因は、東洋体育協会にはその不幸な成立の過程がもとで、何か後ろめたい感じが常につきまとっていたことである。とくに、国際オリンピック招致を目指していた日本スポーツ界にとって、東洋体育協会の活動を大々的に進めることにはためらいがあった。なぜならば、東洋体育協会の問題は、国際スポーツ界における満洲国のプレゼンスの問題と不可分の関係にあったが、この問題はオリンピック招致に不利に作用しかねなかったからである<sup>27</sup>。

ちょうどこの頃、満洲国皇帝溥儀が秩父宮来訪の答礼として自ら日本を訪問、これを記念して東京、京都、下関、京城で日満交驪競技大会が開かれることになり、満洲国から 45 名の選手が派遣された。東京では 4 月 13 日に「満洲国皇帝陛下奉迎運動大会」

24 『読売新聞』1935 年 4 月 23 日。ラッセルが親日に転じたのは 1936 年春の来日以降である。

25 星野龍猪「『人』なく『和』なし」『読売新聞』1935 年 4 月 23 日。

26 拙稿「『満洲国』の誕生と極東スポーツ界の再編」参照。IOC オスロ総会は 1935 年 2 月に開催された。

27 岡部平太の一連の論説「オリムピック東京開催と満洲国」『読売新聞』1935 年 3 月 12 日、「満洲国参加問題オリムピック招致委員会に問ふ」『読売新聞』1936 年 3 月 10 日、「東京オリンピックと満洲国参加問題を論じる」『大阪毎日新聞』1937 年 5 月 12 日、はこの問題を指摘したものである。



が神宮外苑で開催された。『満洲建国十年史』が「極東大会問題以来の一部誤れる日満スポーツ関係を正すべき儀礼をも兼ねて」と記すように、これをきっかけに日満間のスポーツ交流が本格的に再開することになる<sup>28</sup>。6月にはフィリピンの野球、陸上、拳闘の代表団50名が日本を訪れ、日本各地で日比對抗競技会が開催された。こうして東洋におけるスポーツ交流が再び活発化した、それはあくまで東洋大会の枠外の出来事であった。

12月、IOC委員の副島道正は同じくIOC委員で日本に滞在中であった王正廷（中華全国体育協進会会長）の歓迎会を開いた。副島が東京でのオリンピック開催について協力を求めたところ、王は快諾した。一方、東洋大会参加については、「懇談的に支那側参加を慫慂したのみに止まり深く触れることを避け上海マニラ等の極東大会の回顧談に花を咲かせ」ただけであった<sup>29</sup>。オリンピックの開催権を得るには、中国を敵に回すわけにはいかず、副島は東洋大会について深く触れることができなかった。王正廷にとってもそれは屈辱的な思い出であり、あまり触れたくない事柄であった。東洋大会は極東スポーツ界のトラウマとでもいうべき存在であった。

## 第二節 東京オリンピックの波紋

1936年7月31日、ベルリンで開かれたIOC総会で、第12回オリンピックの開催地が東京に決まった。この決定を受けて近畿陸上競技協会を中心に、1938年に東京で開催予定の東洋大会を大阪へ招致する運動が起こった。中華民国の参加はなお疑問とされたが、「満洲国をはじめフィリッピン、インド、シヤム、蘭、仏領インドその他の東洋諸国に遠くオーストラリアの参加も予想されており商工都市大阪が開催するに恰好の国際競技大会」だと位置づけられた<sup>30</sup>。

11月末、副島道正がベルリンから帰国し、東洋大会の開催に波紋を投げかけた。ベルリンのIOC総会で東洋体育協会成立が報告されたとき、王正廷がこれを承認しがた

---

28 『満洲建国十年史』903頁。

29 『東京朝日新聞』1935年12月8日。

30 『大阪朝日新聞』1936年9月10日。

いと発言したことから、副島と王が「政治的見解の影響を蒙ることなく純然たるスポーツ的見地」によってこの問題を円満に解決することを一任された。副島の考えは、満洲国が関係する以上、政治的見解の影響を受けずに解決することはできず、「日、比、支共にオリンピック第一主義で進むべき」で、東洋体育協会は解消すべきだということのものであった。一方、嘉納治五郎は、東洋大会には独自の使命があり、IOC からとやかく言われる筋合いはないと主張した<sup>31</sup>。しかし、これはいささか筋違いな議論である。そもそも IOC に承認を求めたのは東洋体育協会の方である。東洋体育協会は自身で問題を解決することができなかつたがために、IOC の権威にすがろうとしたのであった。

2人のIOC委員の対立が示すように、日本スポーツ界の東洋大会に対する態度にはかなりの温度差が存在した。日本陸上競技連盟は、満洲国との関係から東洋大会を積極的に支持した。一方、オリンピック第一主義を掲げ、かつて極東大会不要論の急先鋒であった日本水上競技連盟は、東洋大会も不要と考えていた。後者はまた近畿陸上競技協会の準備方針に対しても不満を抱いており、この水陸両連盟間の確執が準備の進捗を大きく妨げることになる<sup>32</sup>。

12月18日、近畿陸上競技協会は春日弘会長名で東洋体育協会会長平沼亮三に宛てて、東洋大会を大阪で開催するよう正式に申し込んだ。翌1937年1月10日、『大阪朝日新聞』は沈嗣良の次のような談話を掲載した。「支那は経済建設期にあり、四年目毎にオリンピックおよび全支体育競技大会があり、これに東洋選手権大会を加へれば毎年スポーツに巨額の金を消費することとなる、これは現在の支那としては不可能のことであり同大会には参加出来かねる<sup>33</sup>。」中国側のこうした揺さぶりに反応してか、1月13日東洋大会大阪開催準備委員会代表春日弘、阪本信一が上京、大日本体育協会幹部と

---

31 『読売新聞』1936年11月28日。IOCの報告書によれば、これは7月31日の会議での出来事で、ラッセルもまた副島とまったく同じ考えであった（“Meeting held on Friday, July 31<sup>st</sup>, 1936 morning,” *Bulletin officiel du comité international olympique*, No. 32, Nov. 1936, p. 8）。副島と嘉納の対立は東洋大会の問題に止まらず、東京オリンピックの進め方についても、両者は対照的な意見を持っていた。政治的色彩の濃かったベルリンオリンピックに対する反省から、副島は東京オリンピックを「どこまでもスポーツの精神」でやろうとしたが、嘉納はそれを単なるスポーツの大会に止めず、ベルリンオリンピックのように国家的祭典にすべきだと考えていた。日本国内では後者の意見が大勢を占め、副島は孤立していた。

32 『大阪毎日新聞』1937年3月14日。

33 『大阪朝日新聞』1937年1月10日。

会見し、大阪開催が正式に決定した。期日は1938年6月から7月で、甲子園周辺を会場にし、開催種目は陸上、水泳、野球、サッカー、テニス、バスケットボール、バレーボール、拳闘、ホッケー、水上飛込、女子バスケットボールが予定されていた。また相撲、レスリング、サイクリング、カヌー、卓球、水球、ヨットの各競技団体からエキジビション開催の申し込みがあった<sup>34</sup>。

1月29日に第1回総務委員会が開催された後、フィリピンと満洲国に開催地を大阪に変更する旨が通知され、2月9日に満洲国から承認するとの回答があった。しかしそれ以上に準備が進まないまま2月末に至った。『大阪毎日新聞』は「東洋大会はどうなった？」と題する記事で、準備が停頓した原因が体協と大阪側委員との対立にあると指摘する。体協はもともと大阪開催に乗り気ではなかったが、「某競技団体」（おそらく水上競技連盟）が横槍を入れたことから、再び消極論が台頭した模様である<sup>35</sup>。この問題は平沼が大阪入りして関係者と直接会談した結果解決に至り、3月1日からのよいよ事務所が開設されて本格的準備が始まることになっていた<sup>36</sup>。

3月1日、PAAFは1940年の東京オリンピックに全力を注ぎたいので、来年の東洋大会を中止し、東京オリンピック終了後に開催してはどうかと提案してきた<sup>37</sup>。バルガスは内山清総領事に「若し明年の大会参加の結果か万一比島側の不成績に終るか如きことあらは、其の氣勢を挫くのみならず、相当多額に上るへき世界大会参加の派遣費等に関し、議会の協賛を得る上にも支障を来すへきに付、「大の虫を生かす」万全の方法として、世界大会迄英気を養ふ方然るへしと思料せられ居る次第なり」と告げていた<sup>38</sup>。

皮肉なことに、第10回極東大会で不参加をほのめかし主催国フィリピンを慌てさせ

34 『大日本体育協会史』補遺、大日本体育協会、1946年、61-62頁、東洋大会準備委員会「東洋大会準備委員会誕生経過報告」『オリンピック』第15巻第3号、1937年3月。なお射撃、馬術、体操、自転車、レスリングの開催も検討されていた。

35 『大阪毎日新聞』1937年2月25日。

36 『大阪毎日新聞』1937年3月1日。

37 (*Manila Tribune*, March 2, 1937; 『東京朝日新聞』1937年3月4日。この直前にバルガスは徳川家達への書簡で東京オリンピックに大代表団を派遣することを知らせていた（『東京朝日新聞』1937年2月25日）。

38 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04012480900、体育並運動競技関係雑件 第五巻 (外務省外交資料館)、3画像目。

た日本が、今度はフィリピン側の不参加により慌てさせられる羽目になったのである。しかしフィリピンの提案は決して唐突なものではなかった。1月末、フィリピンのケソン大統領は訪米の途次に日本に立ち寄った際、日本の記者の質問を受けて、東京オリンピックに大代表団を派遣することを約束したが、東洋大会については否定的であった。ケソンは来日前に立ち寄った上海で、日本のIOC委員（副島のこと）が、日本は東京オリンピックに全力を挙げるべきで、「面白からぬ空気にとどざされてゐる東洋大会なるものを解散してしまつた方がすべての点からみて得策だと思ふ」と発言したことを王正廷から聞いたと話し、一体日本はどうするつもりかと記者に尋ねていた<sup>39</sup>。もちろん、フィリピンを出発した後のケソンの言動が直接 PAAF の判断に影響したわけではなかろうが、日本国内の消極論者を勢いづかせたのは間違いない。

3月6日、PAAFは、フィリピン政府が東洋大会に代表選手の派遣費を出さないことを決定したため東洋大会参加は困難である、と正式に申し入れてきた。大阪側準備委員の間にはフィリピンに遠征費を出してもよいとの意向もあり、大日本体育協会の大島又彦会長は「日本はマニラの総会の決議に基き万難を排しても開催する義務がある」と声明した<sup>40</sup>。

さらに日本側の熱意に水を差すような出来事が起こった。中華全国体育協進会の沈嗣良名誉主事が PAAF に宛てた1月18日付けの書簡を、イラナンが転送してきたのである。同書簡は極東体育協会の解消を提案し、各加盟国の意見を徴集することを PAAF に依頼するものであった。東洋体育協会の郷隆名誉主事は「東洋体育協会の解消を目的としたものと解する以上に、何等かの政治的な意味が含まれてゐる」とし、東洋大会それ自体の形式について根底的に再検討する必要があると述べた<sup>41</sup>。中華全国体育協進会は1936年11月の董事会で極東大会の準備を停止することを決めていた<sup>42</sup>。しかし、沈嗣良がフィリピンにこの件を通知したのは、日本で東洋大会の準備がはじまつたちょうどその時であった。中国側の意図は、フィリピンに東洋大会への参加を思いとどま

39 『大阪毎日新聞』1937年2月1日。

40 『東京朝日新聞』1937年3月7日。

41 『東京朝日新聞』1937年3月14日。山本は日本YMCA同盟委員長で、王正廷はかつて中国YMCA総主事、孔祥熙は中華留日YMCA総幹事をつとめた。

42 「一月来之体育行政」『勤奮体育月報』第4巻第3期、1936年12月。

らせようとするものであった。一方、フィリピンが東洋大会不参加を決めたあとでこの件を日本に通知したのは、中国からの誘いを拒否したことを示して、東洋大会不参加による日本側の心象の悪化を最小限にとどめようとしたのであろう。

東洋大会に対して消極的だったフィリピンや中国にとって、東京でのオリンピック開催決定は朗報であった。東京オリンピックに全力を尽くすという名目で東洋大会の問題を棚上げにすることができたからである。中国でもフィリピンでも、たとえオリンピックが東京で開かれようとも、それに参加することが政治的問題になる可能性は低かった。沈の書簡が送られてまもない頃、フィリピンの新聞で、次のような記事が掲載された。

地元の競技役員たちは、まったく競争にもならないような弱小の国々との競技会を継続することを日本はそれほど気にしていないと感じている。……日本は国際スポーツにおいて羨むべき卓越した地位にまで昇ってしまったので、フィリピンは他の相手を探さなくてはならないだろう。おそらくフィリピンは1912年にともに極東体育協会を設立した中国の方に再び顔を向けることになるだろう<sup>43</sup>。

この記事が指摘するように、極東スポーツ界において日本の力が他を圧倒してしまった状況で、東洋大会のような総合選手権大会を開催する意義は、競技的にはほとんどなかった。それでも日本が東洋大会にこだわったのは、それを満洲国の国際競技界進出の舞台にしようとしたからである<sup>44</sup>。東洋大会を積極的に支持していたのは、満洲国と日本スポーツ界の一部だけであったといっても過言ではない。

ちょうどこの頃、山本忠興は上海の日本人YMCA会館建設の関係で上海を訪れ、同YMCAの依頼を受けて王正廷、孔祥熙に会った。山本によれば、王は東洋大会について、オリンピックがある以上、度数が多い等の理由で反対し、フィリピン側のいうように招待競技の形式で自由にやっていけばどうかと語ったという<sup>45</sup>。王正廷は当然ながら東洋大会の意義を認めなかったが、その形式を外せば中国も極東におけるスポーツ交流

43 *The Manila Daily Bulletin*, February 1, 1937.

44 東洋大会と平行して、国際陸上競技連盟への加盟という形で、満洲国の国際競技界進出を果たそうとする動きもあった。満洲国は1939年7月に国際陸上競技連盟への加盟を承認され、これによりオリンピック参加の可能性が開けた。

45 『東京朝日新聞』1937年3月22日。

に参加すると言明したのである。そして実際、バスケットボールの上海選抜チームが4月8日に上海を発ち、10日間の日程で日本の大学チームと交流をおこなった。コーチの黎宝駿は極東大会に3回出場し、第6回大阪大会で活躍した選手である<sup>46</sup>。

大日本体育協会は4月20日に理事会を開催し、5月下旬に東洋体育協会臨時総会を開催して最終的決定を下すことを決めた。ただし、体協としても1938年に開催するのは困難とみており、延期する場合、かわりに国際招待競技大会もしくは日満対抗競技大会を開催することを検討していた。満洲国側もこれを支持し、大満洲国体育連盟の田中真茂主事は「満洲国体連は日本の立場に同情するとともに、フィリピンにも是が非でも参加せよとはいわない。現在満洲国の東洋大会準備委員会は結成を見合わせている。オリンピックの前哨戦として各国チーム招待競技会の形にし、東洋大会については改めて考えればどうか」とコメントした<sup>47</sup>。

東洋体育協会臨時総会は6月3日に開催と決まり、5月29日にPAAF名誉主事イランが来日した。PAAFの立場は依然として大会不参加であった。総会で日本と満洲国代表はフィリピンの参加を強く要請し、イランは両国代表の熱意に押されて考えを改め、フィリピンへ戻ってから東洋大会実行委員会を開き、参加に向けて努力することになった<sup>48</sup>。大日本体育協会はイランを援護すべく、阪本信一を派遣してPAAFの会議に参加させ、説得工作に当たらせることにした<sup>49</sup>。日本側ではイランの対応を「好意的ジェスチャー以上に出ない頗る抽象的なもの」と見る向きもあったが<sup>50</sup>、イランはマニラに戻ってから日本の準備状況を好意的に紹介しており、あるいは本当に心を動かされたのかも知れない<sup>51</sup>。

しかし極東大会解散劇で批判の矢面に立たされたバルガスは、東洋大会に対して全

---

46 上海軍は日本に好印象を与えた。三橋誠は「支那チームの態度の立派さには全く敬意を表した。……上海軍が支那大陸にありてよきスポーツ指導者であり、日本スポーツ界の人びとの諒解者として将来大いに活躍される様希望して筆をおく」と記す（「全上海対大学O・B軍戦を観る」『籠球』20輯、1937年8月）。

47 『東京朝日新聞』1937年4月21日。

48 『東京朝日新聞』1937年6月4日。

49 『東京朝日新聞』1937年6月6、9日。

50 『大阪毎日新聞』1937年6月4日。

51 *The Manila Daily Bulletin*, June 19, 1937.



く乗り気ではなかった。バルガスは6月17日にケソン大統領官邸でPAAF常務会を開いたが、これはイラン人が帰国した後、阪本が到着する前の出来事であった。阪本は「日本に好意を持つイラン人を助け極力大会参加を慫慂する決心」だったが<sup>52</sup>、マニラに着いた時にはすでに会議は終わっていた。常務会は東洋大会参加の件を国民議会に請願し、その協賛を得ることができれば参加すると決定した。『東京朝日新聞』が「国民議会の協賛を得ることはすこぶる至難と見られて居る」と指摘する通り、これは事実上不参加を決めたのも同然であった<sup>53</sup>。PAAF常務会の議題を見てみると、全マウイ野球チーム、慶応大学野球部、南京・上海バスケットボールチーム、早稲田大学野球部、アメリカ西海岸の野球チームと陸上選手等、実に十数項目にわたる海外との交流計画が挙げられている<sup>54</sup>。議題の多さと新聞における扱いからみて、東洋大会の問題はさほど真剣に取り上げられなかったと思われる。

阪本はバルガスらと会談、9月にケソン大統領がアメリカから戻ってくるのを待ち、10月にPAAF総会を開いて最終的な決定をすると告げられた。阪本はバルガスに対して、ケソンへ電報するよう要請したが、「ケソン大統領は重大な使命のため活躍中で事情が判明してゐない、この種問題は早急に電請困難である」と断られた<sup>55</sup>。フィリピンでなすすべのなくなった阪本は東南アジア各地を回って東洋大会への参加を要請することになった<sup>56</sup>。阪本は8月7日に帰国した。

阪本が帰国したちょうどその日、横浜にグラント号が着岸した。大日本体育協会評議員の野津謙はグラント号に搭乗していたフィリピンのイカシアノ (Francisco B. Icasiano)、シャムのバラモト、蘭印のベヴエリを招いて東洋大会への参加を要請した。同船にはケソン大統領も搭乗しており、野津は帝国ホテルでケソン大統領にあい、東洋大会への協力を懇望した。ケソンは、東洋大会の件については全く聞いていないので帰国して事情を聞いてからでないと答えられない、と話をかわした<sup>57</sup>。

52 『東京朝日新聞』1937年6月8日。

53 『東京朝日新聞』1937年6月18日。

54 *The Manila Daily Bulletin*, June 19, 1937; (*Manila*) *Tribune*, June 18, 1937.

55 『大阪毎日新聞』1937年6月26日。

56 『東京朝日新聞』1937年6月26日、7月21日。

57 『大日本体育協会史』補遺、64-65頁。

日本はまたしてもフィリピンにしてやられたのである。そしてまたしても憲法が災いすることになった。問題となったのは憲法第10条「競技参加の条件」である。極東大会の憲法では、加盟国でなければ競技に参加できず、加盟には全加盟国の賛成を必要とした。1934年の極東大会では、中国の反対により極東体育協会への加盟が絶望的となった満洲国を、日本側は招待形式で参加させようとしたが、この規定のために、その戦略を阻まれた<sup>58</sup>。この苦い経験に鑑み、東洋大会の憲法では、加盟国の3分の2の賛成があれば、非加盟国でも競技に参加できると改めた。また、極東大会では、一度しか選手を派遣したことがない蘭印や仏印が、日本、中国、フィリピンと同等の権利を持っている点が問題となった<sup>59</sup>。極東大会の解散を決めた会議には日本とフィリピンしか出席していなかったが、蘭印と仏印をカウントすれば、この会議は定足数に達していないことになり、会議は不成立になるからである。日本側は会議の招集の範囲を日本、中国、フィリピンに限定することで、会議が定足数に達したとみなしたが、これは苦しい解釈であった。そこで東洋大会の新憲法では、主催国（大会を主催する権利を有する国）と加盟国を区別し、加盟国には少なくとも1種目、主催国には7種目に出場する義務を課した<sup>60</sup>。

フィリピンはこの条項を楯に取った。主催国たろうとすれば7種目140名の選手を派遣しなければならないが、東京オリンピックを前にこれだけの選手を派遣する財政的余裕はない、とフィリピンは主張した。ならば招待形式にしてはどうかという日本側の提案に対しては、選手権7種目に足らぬ種目に選手を派遣したのでは、フィリピンは第2回東洋大会の主催資格を喪失すると答え、では日本が経済的援助をするからという、それはフィリピンの名誉にかけて断ると答えた<sup>61</sup>。

フィリピンは日本との交流を忌避していたのではない。東京オリンピックには200

58 拙稿「『満洲国』の誕生と極東スポーツ界の再編」で示したとおり、加盟国でなければ競技に参加できないという規定は日本の要求によって新たに付け加えられたもので、その狙いは、1930年の東京大会に朝鮮人が「朝鮮」代表として出場するのを防ぐためであった。

59 仏印や蘭印に対する批判は、たとえば『読売新聞』1934年5月29日など。蘭印は結局インドを中心として組織されたWestern Asiatic Games Federationに加盟した。同連盟は1934年に西アジア大会を開催したが、これは戦前の最初で最後の大会となった。

60 『読売新聞』1935年4月23日。

61 『東京朝日新聞』1937年5月30日、6月1日、5日。

名の大選手団を送ることを約束し、さらにイラナンはこのとき慶応大学野球部、早稲田大学籠球部、大日本アマチュアレスリング協会、全日本アマチュア拳闘連盟、日本自転車競技連盟と交渉して、翌年2月にマニラで開催されるカーニバル大会参加の了承を取り付けている<sup>62</sup>。要するに東洋大会にだけは参加したくないのである。

毎日新聞記者福本福一はその理由を次のように解釈した。ケソンはいまワシントンで完全独立の繰り上げを働きかけており、これが実現すればフィリピンは1939年に完全な独立国となる。国家の重大事に直面しているフィリピンとしては、いまは自重すべきときである。ケソンは渡米前日本に立ち寄った際、次のオリンピックには完全な独立国として堂々と参加し、新興フィリピン国民の意気を世界に示したいと語っていた。この言葉は、中国の感情を刺激する東洋大会は日中関係が好転してから参加したいという意図に解釈できる、と<sup>63</sup>。独立を前にしたフィリピンが政治的外交的に厄介な問題を抱える東洋大会への関与を避けたかったのは当然であった。

日本側にも問題があった。深刻な内部対立を抱えた大日本体育協会は、一丸となって東洋大会を推進することができなかった。それどころか国家的プロジェクトであるオリンピックでさえ、体協と東京市との対立により、準備が遅々として進まない状況にあった。日本と満洲国の両体育協会の関係も、東洋大会については一致していたが、東京オリンピックに関しては鋭い対立を孕んでいた。満洲国側は東京オリンピックへの正式参加を要求していたが、日本側は、満洲国の参加は時期尚早であり、IOC総会ではこの問題を取り上げないことを宣言した<sup>64</sup>。岡部平太が指摘するように「これももし火を噴いたら東京オリンピックは明日からでもメチャメチャになる」危険があった<sup>65</sup>。しかし満洲国側は、極東大会のときのように強硬な態度にはでることができなかった。東京オリンピックは国策だったからである。岡部は新京で「この問題に対する発言」をすることを「非公式に禁ぜられて居」た<sup>66</sup>。

しかし日本では、東京オリンピックという国策自体の是非を問う動きもあった。東

62 『東京朝日新聞』1937年6月5日。

63 『大阪毎日新聞』1937年6月2日。

64 『大阪朝日新聞』1937年5月15日、『盛京時報』1937年4月22日。

65 岡部平太「不可解な準備方法 満洲国参加問題は どうする」『大阪朝日新聞』1937年5月12日。

66 岡部平太「袂別の辞」『体育と競技』第14巻第11号、1935年11月。

京オリンピック反対の急先鋒であった河野一郎は、衆議院で「満洲国はさきに極東大会への参加を拒否されたがそれを再び東京大会で繰返したらどうなるか、それこそ大問題で帝国の面目は丸潰れとなる、極東大会から除かれてもオリンピック大会にだけは堂々と参加させねば満洲国の友邦たる立場はなくなる、これについて確たる方針があるか」と質問、文部次官はまともに答えることができなかった<sup>67</sup>。スポーツと政治は別だというレトリックはもはや通用しなくなりつつあった。

### 第三節 バスケットボール東洋選手権大会の開催

フィリピンにとって幸いなことに、1937年7月に勃発した日中戦争は日本の東洋大会準備を停顿させた。PAAFは9月15日までに東洋大会参加の可否について返答することになっていたが、彼らは結局この約束を履行しなかった。12月15日に大日本体育協会は東洋体育協会委員会を開催し、大阪準備委員会阪本信一、大満洲国体育連盟の鈴木武史顧問らの賛意をえて、東洋大会の無期延期を決定した。開催の時期については明確にせず、「支那事変終結と共に支那に誕生するであらう運動競技団体の加盟を待つて、真に東洋大会の名にふさはしき大会を開催せんと期待」し、事実上準備の棚上げを宣言したのである<sup>68</sup>。

東洋大会の無期延期が決定されてまもなく、早稲田大学籠球部、ボクシングとレスリングの日本代表がPAAFの招聘をうけてフィリピンへ遠征した。レスリング監督の八田一郎がバルガスとイラナンに対して東洋大会のことを尋ねたところ、日本が会期を延長したことを喜び、次の大会は1942年に開いて欲しいと語った<sup>69</sup>。また5月にレスリングとボクシングの定期交換試合を日本で行うことが決まった<sup>70</sup>。

この遠征で早稲田大学籠球部は5勝4敗という成績を挙げた。これまでの日本バスケットボール史からして、これは快挙と呼ぶにふさわしかった。1934年の極東大会では、

---

67 『読売新聞』1937年2月27日。ちなみに、河野はこうした経歴を買われて、戦後に東京オリンピック担当相として活躍することになる。

68 『東京朝日新聞』1937年12月14日。

69 『大阪毎日新聞』1938年1月29日。

70 『大阪毎日新聞』1938年1月29日。

フィリピンが優勝し、中国が2位、日本は3位だった。1936年のベルリンオリンピックで日本は中国を大差で下した。1937年4月に上海選抜チームが来日したときには、早稲田大学が僅差でこれを振り切ったが、関学、関大、大学O・B軍は敗北を喫した。日本はようやく中国に追いついたところで、フィリピンは少なくとも実績の点ではまだ格上の存在であった。ベルリンオリンピックに役員として参加した浅野延秋は、ある座談会で日本はフィリピンに勝てそうかと聞かれ、「それは僕は今度のチームなら勝てるやうな気がしますね。たゞやつて見ない限りは、とんだことでひっくり返つたりしますから保証の限りぢやないですけども」と答えていた<sup>71</sup>。

大日本バスケットボール協会は、東京オリンピックに備え、1938年に東洋大会への参加と米国チームの招聘を考えていたが、日中戦争の勃発により、これらの計画が立ち消えになった。東洋大会の「補填の途」を探っていた協会は<sup>72</sup>、5月に日本、フィリピン、満洲国、「支那」を招いてバスケットボールの東洋選手権大会を開催することを決定した。同会会長副島道正とともに東洋大会不要論の急先鋒であった李相伯（相伯、字は想白）理事によれば、「東洋大会なるものは日本が東亜の盟主として、大東一体の実をあげるに重要な機能を有するものであり、支那事変の突発によつて、此の日本の使命は益々その重要さを増して」いるが、大日本体育協会が主催して総合競技会を開催できるような状況ではない。アジアのバスケットボールは実力や普及の面で世界的に優位を占めているばかりでなく、日本、フィリピン、満洲国、「支那」で広く国民に愛好されている。以上の理由から大日本バスケットボール協会が独力で東洋選手権大会を主催するに至ったという。さらに東洋選手権大会の意義に関しては、東京オリンピックに対する試練の機会をつくること、満洲国に实际的な国際競技場進出の機会を提供すること、「支那特に北支に於ける支那青年を招集して、所謂抗日派の野心による政治的牽制に禍されない純真なる青年同志の提携融和の実を示すこと」、銃後の国力充実を外国に宣伝すること、日本国民の平和愛好、文化事業熱愛を海外に認識させること等を挙げた<sup>73</sup>。

71 「オリムピック遠征軍座談会」『籠球』18輯、1936年12月。

72 李想白「二年後に迫つた東京大会の対策（六）」『東京朝日新聞』1938年2月26日。

73 李想白「東洋大会の意義」『籠球』22輯、1938年9月。

「支那」、すなわち日本軍占領下の華北からは、大会の趣旨には賛成だが準備不足で参加できないとの返事があった<sup>74</sup>。フィリピンは参加に応じたものの、関心は高いとは言えなかった。『トリビューン』『マニラ・デイリー・ブレティン』2紙は大会の様様について全く報道しなかった。日本からバスケットボール大会への招待があったことを報じた記事には、「支那」や満洲国も招待されていることには触れられていない<sup>75</sup>。北京の『新民報』によれば、フィリピンはこの大会の名称がいわゆる東洋大会と同じであることに難色を示していたという<sup>76</sup>。フィリピンは東洋選手権大会を日比間の定期交換試合として位置づけようとした。バスケットボールの東洋選手権と同時に開催されたレスリングとボクシングの大会は純粋に日比対抗戦であったし、PAAFが冬にふたたびバスケットボールの全日本代表軍を招聘したいと申し出たのもそうした気持ちのあらわれといえる。

東洋選手権大会は2日目に事実上の決勝戦である日本対フィリピン戦がおこなわれ、日本が31対29のスコアで勝利し、優勝を決めた。李相佰によれば、それは「日本籠球の実力が何時の間にか完全に永年極東籠球界の王座を占有してゐた比島を追ひ抜いてゐることを証明」したものであった<sup>77</sup>。芦田監督によれば、「従来日本の籠球が理論上からは少なくとも東洋の第一人者でありながら、実際がこれに伴はなかつたといふ大きな矛盾をはつきりと目の前で解決し、吾々の進み方が決して自己陶醉の独善でなかつた事を明示」するものであった<sup>78</sup>。少々大げさな表現かも知れないが、極東大会でフィリピン、中国の後塵を拝しながら、両国より「特に学ぶべきものを何にも見出さ」ず、「理想を大きく目標を高くして琢磨することを止めなければ、他の運動競技と同様やがては彼れを導く位置に立つことも容易なものがあらう」と強がっていた日本バスケットボール界が、ようやく成績の面で東洋の第一人者となったことを示せた喜びと安堵が見て取れよう<sup>79</sup>。

74 『盛京時報』1938年4月22日。

75 (*Manila Tribune*, March 16, 1938.

76 『(北京)新民報』1938年3月17日。

77 李想白「東洋大会の意義」『籠球』22輯、1938年9月。

78 芦田伸三「技術から見た東洋大会」『籠球』22輯、1938年9月。

79 大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』大日本体育協会、1930年、200頁。



かくてバスケットボールの東洋選手権大会は成功裏に終わった。日本にとってバスケットボールの東洋選手権大会は東洋大会への第一歩であったが、フィリピンにとってそれは東洋大会とは何の関係もないものであった。東洋大会は傷ついた権威を回復できないまま、ついに開催されることなく終わるのである<sup>80</sup>。

## 第二章 東亜新秩序と極東スポーツ界

### 第一節 東京オリンピック開催権返上と「日満華」構想

1938年7月15日、東京オリンピック開催権返上が正式に決定し、目標を喪失した日本のスポーツ界は、今後の新しい方針を模索し始める。『陸上日本』はさっそくスポーツ界の人士に今後の方策に関するアンケートを行った<sup>81</sup>。6つの質問項目の第1は「東洋選手権開催の時期」であり、第2が「日満支」を通ずる陸上競技国策に進むべきか」、第3が「時局安定後に国際陸上競技開催の計画の遂行（独、伊、波、洪、米、満洲、新生支那）等の親日国の選手招待は」、第4が「第十二回オリンピック大会を他国で開催される場合に於ける選手派遣の方針は」であった。編集部にとって、ポスト東京オリンピックの新方針としてまず取り上げられるべきなのが東洋大会であって、そのほかのオプションとして「日満支」や「親日国」を対象とする競技会があったのである。これに対してどのような回答が寄せられたのか。関係箇所を抜粋してみよう。

(1) 星野龍猪（読売新聞運動部長）「オリンピック辞退も凡ては東洋永遠の平和を期すればこそであるから、銃後国民の本分に立脚して決定さるべきものと考へます、東洋選手権にしろ、日満支計画にしろ、東洋平和の礎となる意味において時期さへ許すならば大いにやるべきものでせう、日満支を中心として東洋各国を参加させる建前において東洋選手権大会の意義が非常に増大される筈です。」

(2) 河合勇（東京朝日新聞運動部長）「東洋選手権大会は、満洲国、支那新政権を参加せしめ得る時期に開くこと。」

80 東洋大会積立金はその後も続けられていた（『大日本体育協会史』補遺、113-116頁）。東洋大会が正式に解消されるのは1943年11月7日である。

81 「東京大会中止後の新方策は？」『陸上日本』第91号、1938年8月。

(3) 伊藤寛 (朝日新聞運動部) 「東洋選手権大会は事情が許すなら開くを可とす。日満支を通ずる陸上競技会は技術的には大なる効果は期待し難きものであり、強ひて開くべき程のものではなく、又陸上競技を政治的動きの渦中に投ずるは慎むべきであるが満支陸上界を技術的に指導する意味に於て十分協力すべきである。」

(4) 小沢豊 (陸連理事) 「国策的に見て来年からでも何等かの形式で実行したら如何、又之が実行は円満なる東洋選手権への発足と考へます、形式は、日本の実情から押して日本へ招くよりも遠征すべきと考へます。」

(5) 野口源三郎 (ヘッドコーチ) 「東京大会を返上した精神に則り、今後種々の国際的競技会を計画したり、又考へたくない。……今目標を失つたスポーツマンに、現在の施設で出来、経営も尠なく、しかも何か精神的な力の加つた新たな目標を与へてやることは必要であると信ずる。それは質実剛健を旨として十一月三日を中心として神宮体育大会を開催することであらう。此の非常時局にあつて明治大帝の御霊に国民が勇壮なる競技を奉納することは意義深い。」

(6) 阪本信一 (陸連評議員) 「東京オリンピックすら返上せる以上は東洋大会開催はこの非常時期に問題とならず。スポーツはフェアプレーの精神の上に立つ、無理やりに日本の改治的理由のために、新生支那の選手を日満支国際競技に出場せしむるが如きは小生の採らざる所です。」

東京オリンピックに深く関わった野口や、東洋大会開催に奔走した阪本らが国際競技会開催自体に否定的であるのを除くと、おおむね東洋大会の開催に肯定的であった。ここでは、「日満支」の構想が東洋大会とは全く別物であり、かつそれが政治的意義を有すると認識されていたことに注意したい。なお、星野は「東洋の平和」を口にしたが、それはバルガスの望んでいたものと全く違ったものであることは言を要すまい。

大日本体育協会は7月25日の理事会で、「今秋明治節を中心として時局下にふさわしき一大競技会を開催しオリンピックの目標を失つたわが競技界を振興せしめると同時に国民志気の作興を計る」として次回理事会で具体案を検討することを決めた<sup>82</sup>。8月23日の理事会では、「日満支」が具体的な計画として浮上してきた。おりしも下村会長は9月6日に京城で開かれる総督府会議に出席し、その後満洲国と華北の視察旅行

82 『東京朝日新聞』1938年7月26日。この企画は国民精神作興体育大会として実現する。

をすることになっており、下村会長が両国のスポーツ関係者に「日満支」大会開催の意向を打診することになった。下村自身の説明は次の通りである。

かうした旅に上るに際し、明春あたり日満支の間に競技会などを催したならばといふやうな茶話が体育協会の理事会の席上で持ち上つた。競技会のやり方なり、何日どうしてよいか、さうした事は二の次にして、とにかく鮮満支の同好の人々と顔見知りになる、スポーツを通じて協調をすすめる、連絡を周密にする、彼我を通じて体位向上の運動を益々盛んにしたい<sup>83</sup>。

「日満支」による競技会を検討していたのは、大日本体育協会ばかりではなかった。華北においてスポーツは占領政策の一端を担い、政治宣伝の道具として活用されていた。『新民報』社説は、6月26日に予定されていた日独伊三国防共オリンピックと7月下旬に予定されていた満日対抗競技会を国際オリンピックと対比させ、前二者はさらに重大かつ深遠な意義を有していると主張した。スポーツを通じて身体を鍛練し、新国家、新主義を守ること、また防共の決心をかき立てることができるからであった<sup>84</sup>。7月には天津の郭蔭軒が「華北体育之展望与中日満体育之提携」と題するラジオ講演で三国スポーツ界の提携、およびその防共上の意義を説いた。また、北京の新民会は「防共親善国」たる日本と満洲国に対して「防共東洋体育大会」を開催すべく協力を要請していた<sup>85</sup>。このように、華北では政治主導のスポーツが展開され、そのなかから、日本、満洲国、「中華」の間で競技会を開催しようという動きが生まれていたのである。

これらの構想がどこから出てきたかという点、岡部平太にたどり着くのではないかと思われる。岡部ははやくも1938年1月に『読売新聞』に寄せた論説で「日本と満洲国に今度新しい支那が加はれば、それで立派な東亜のスポーツドムは完成する訳である」と主張し、東京オリンピックは満洲国や中国の参加問題でややこしいことになるだろうから、「それよりも日本のスポーツ支配階級よ、もつと東亜のことを考へよ。

83 下村海南〔下村宏〕『朝鮮・満洲・支那：随筆評論集』第一書房、1939年、209頁。岡部の後輩で、支那派遣軍の主計少尉をつとめていた川崎秀二は、下村のこの書を読んで、その「熱意」に疑問を呈している（「大陸へ伸す」『体育日本』第17巻第10号、1939年10月）。

84 「国際競技運動」『（北京）新民報』1938年6月13日。

85 『（北京）新民報』1938年7月23、24日、『東京朝日新聞』1938年7月26日、『満洲日日新聞』1938年7月26日。

さうすれば世の人からあまり馬鹿にされずに大道が歩けるのだ」と、国際オリンピック志向の日本スポーツ界を批判していた<sup>86</sup>。『新民報』はのちに「日満支」大会について「新民会体育協会顧問で、中国に在住する日本体育界の唯一の有名人、岡部平太氏の提唱により挙行される中日満三国競技大会」と報じている<sup>87</sup>。岡部は日本、満洲国、華北のスポーツ界に通じたほぼ唯一の日本人であった。この3国による競技会を現実的なものとして構想できるのは岡部をおいて他になかった。

東京で「日満支」構想が浮上したとき、岡部はちょうど東京にいた。岡部は東京オリンピック日本陸上代表のコーチ就任を依頼されて来日したものの、東京オリンピックが中止となり、東京でなすべきこともなく、毎日文藝春秋社に行つては、菊池寛らと将棋を打っていた。岡部が大日本体育協会の理事たちにこの構想を直接もちかけることは十分可能であった。また『読売新聞』が「新民会が同様の計画をたて、わが体協に協力を要請して」いると言及していることからわかるように、日本側も新民会の要請を知らなかったわけではない<sup>88</sup>。

9月12日、新京の中銀クラブで懇談会が開かれた。満洲国側は古海忠之、久保田完三、飯沢重一、田中真茂らが出席した<sup>89</sup>。下村は来年5月か6月に大連で開きたいという日本側の意向を伝えた。満洲国側は対抗競技ではなく交驩競技とし、会場は東京としたいとの要望を出した。田中によれば満洲国側の要望は次のようなものであった。

三国オリンピック開催については日本側で立案されたもので……支那の現状から見て早急に開催出来るかどうかは北京に行き支那側代表者と打合せた上でないと判らない、自分の希望としては来年六、七月ごろ東京で開きたいと思ふ、開催地については……開催趣旨から見て東洋の盟主である日本しかも文化に体育にあらゆる施設の完備した東京で開き満支の若人たちに種々の施設を見学させ日本をよく認識させたいと思ふ<sup>90</sup>。

---

86 『読売新聞』1938年1月13日。

87 『(北京)新民報』1939年3月29日。

88 『読売新聞』1938年8月24日。

89 大日本体育協会副会長平沼亮三も下村に続いて満洲国入りし、意見交換をしている（『満洲日日新聞』1938年10月1日）。

90 『満洲日日新聞』1938年10月1日。

田中をともなって北京入りした下村は、9月27日に新民会本部で、29日に六国飯店で、それぞれ会談を開いた。軍顧問として中国駐在中であった湯沢三千男（大日本体育協会副会長）<sup>91</sup>、新民会の小沢開作総務部長、菅井浩主事らにくわえ、余晋齋（北京市長）、李洲（北京体育専科学校校長）ら中国人関係者も出席した。その結果、来年5月に神宮外苑で陸上、サッカー、バスケットボール、バレーボールの大会を開くことになった<sup>92</sup>。しかし、下村が帰国前に大連で、「支那はバスケ、サッカーしかだせないから交驩競技会か招待競技会となる。東京へ招待してもいいし、大連でも新京でも。時期は8月案もあるが、自分は5月がいい」と主張したことからわかるように、完全に合意に至ったわけではなかった<sup>93</sup>。

下村の北京滞在期間中、北京市公署教育部と新民会首都指導部の主催で「体育週間」が実施されていた。バスケットボール、バレーボール、テニス、サッカーの競技会、体操の講習会や選手権大会、国術の表演が行われたほか、各学校での朝会、作文、そしてラジオ放送を通じて体育の宣伝が行われた。華北スポーツ界が果たして代表を派遣できるかが最大の懸念材料だっただけに、下村は北京の状況をみて、「日満支」大会開催にむけてますます意を強くしたであろう。下村が帰国した直後、新民会首都指導部体育会は日満スポーツ親善使節団を派遣した。団長は李洲で、10名のバスケットボール選手を神島好夫と安田光昭が引率し、満洲国と日本でバスケットボールの交歓試合を行い、靖国神社、明治神宮を参拝、明治神宮外苑で開催された国民精神作興体育大会を見学した<sup>94</sup>。

1939年1月30日、大日本体育協会は満洲国の田中真茂をむかえ、「日満支」大会に関する懇談を開いた<sup>95</sup>。翌31日にオリンピック東京大会組織委員会事務局が閉鎖、2月9日には組織委員会で報告書編纂を担当していた鈴木良徳が大満洲国体育連盟主事に就任し<sup>96</sup>、「日満支」大会開催にむけて本格的な準備が始まった。その矢先、大会費用に

91 湯沢はかつて内務省官吏として明治神宮競技大会の設立に尽力した。

92 『東京朝日新聞』1938年10月1日、下村海南『朝鮮・満洲・支那』214-215頁。

93 『満洲日日新聞』1938年10月6日。

94 『(北京)新民報』1938年10月13日。JACAR: B04012482300 (2-3 画像目)。

95 『大阪朝日新聞』1939年1月31日。

96 R・K生「鈴木良徳論」『満洲日日新聞』1939年4月13日。

からんだ開催地問題、中国側の参加種日問題のために協議は暗礁に乗り上げ、満洲国では「オリンピックを返上せる日本体協の斯界に対するゼスチュアアではないかとさへ観測されるに至つた<sup>97</sup>。」大満洲国体育連盟は3月2日の理事会で、「日満支」大会について、9月に新京で開催し、種目は陸上、バスケットボール、バレーボール、サッカーとする案をまとめ、鈴木良徳を説明のため日本に派遣した<sup>98</sup>。日満間の協議の結果、満洲国案が採用され、華北との交渉は日本側が進めることになった<sup>99</sup>。3月末、華北新民体育協会の菅井浩は満洲国経由で日本に行き、4月4日に大満洲国体育連盟の鈴木良徳主事、大日本体育協会の末弘巖太郎理事長と会談した。この席で菅井は大会の名称を「日満華」とするよう希望し承認された。また菅井は「中支」も参加を希望していることを伝えた<sup>100</sup>。菅井、鈴木両名は7日に開かれた体協理事会に出席し、日満華大会の開催が正式に決定された。参加人数は日本が100名、満洲国が110名、支那が70名と見積もられ、翌年には日本で、その翌年には北京で開催する意向が示された<sup>101</sup>。以上の一連の交渉過程において、満洲国はつねに積極的であったが、日本側は主導権を握りつつも消極的姿勢に終始し、開催地の権利さえ放棄した。その理由は第一に財政不足であったが、日本国内でのスポーツに対する批判の高まりも原因であった。この点は第三章で論じたい。

## 第二節 日満華交驩競技大会の開催

1939年9月1日、ヨーロッパで世界大戦が始まったその日、満洲国の国都新京では「平和の祭典」が挙行されようとしていた。雨天で延期された開会式は、午後2時40分、定刻よりかなり遅れてはじまった。まず大会会長の神吉正一（民生部次長）による開会宣言があり、三国の国旗が掲揚された。その後、明治神宮の神木で点火された日満

97 『満洲日日新聞』1939年2月28日。

98 『満洲日日新聞』1939年3月4日。

99 『東京朝日新聞』1939年3月17日。

100 『満洲日日新聞』1939年4月5日、『東京朝日新聞』1939年4月5日。華中では前年に新中国体育協会が設立され、日満華大会参加へむけて準備を進めたが、結局間に合わず、参加を断念した。

101 『満洲日日新聞』1939年4月8日。



華の聖火が3つの聖火台にそれぞれ移された。上空には飛行機が飛来し、日滿華の国旗が宙を舞った<sup>102</sup>。

聖火は1928年のアントワープオリンピックで初めて採用された新しい「伝統」である。一方、聖火リレーは、1936年のベルリンオリンピックでディーム（Carl Diem）が考案したものである。この新しい試みが「伝統」になるかどうかは、次の東京オリンピックが鍵を握っていた。古代オリンピアと現代のベルリンを結びつけることに大きな意義を見出していたディームは、東京オリンピックにおいて西洋と東洋を結びつけるべく、オリンピアから東京に至る壮大な聖火リレーを提案していた。一方、日本国内では天孫降臨の地か神社で採火した「神火」をリレーすべきだという意見が強かった<sup>103</sup>。それは一つには資金不足が原因であり、また一つには東京オリンピックが皇紀二千六百年の奉祝行事として考えられていたからであった。聖火リレーは大会の権威の源泉をどこに求めるかを示す指標であり、東京オリンピックは古代ギリシアではなく古代の日本を選んだのであった。

日本で最初にこの種の行事がおこなわれたのは、おそらく1938年11月の国民精神作興体育大会で、このときは伊勢神宮から明治神宮まで、聖火ならぬ「聖矛」がリレーされた<sup>104</sup>。矛になったのは、「聖火は途中で消へる憂へがあるので、その他日本の国体の意義から言つても聖矛の崇厳貫徹こそ意味深」いためであった<sup>105</sup>。1万名以上が参加し、ベルリンオリンピックの金メダリスト孫基禎が矛をかかげて神宮競技場に到着、最後の走者金栗四三に矛を手渡した。金栗は、1912年に三島弥彦（三島通庸の三男）とともに、日本人としてはじめてオリンピックに出場した人物である。

日滿華大会では当初三国それぞれが聖火を準備するという計画になっていたが<sup>106</sup>、満洲国側が聖火を日本から運んでくるよう強く要請した<sup>107</sup>。満洲国の日本人はあくまで日本に権威を求めていた。しかし聖火の運搬は困難だということで、最終的には明治神

102 『満洲日日新聞』1939年9月2日、『盛京時報』1939年9月2日。

103 橋本一夫『幻の東京オリンピック』日本放送出版協会、1994年、194-203頁。

104 『写真週報』第40号、1938年11月16日。

105 野口源三郎「戦捷祈願矛リレーに走りて」『学校体育』第20巻第5号、1938年。

106 『東京朝日新聞』1939年5月30日。

107 『満洲日日新聞』1939年7月6、29日。

宮から古式発火用神木を持参することで決着がついた<sup>108</sup>。8月31日に新京神社で挙行された聖火点火の儀では、修祓、祝詞奏上のあと、明治神宮から持参した神木により火が点けられ、昨年満洲各地の霊廟からリレーによって集められ新京神社で燃え続けていた火と合わせ、「中華」軍が持ってきた孔子廟の神木に移し、三国の親善を固める儀式とした<sup>109</sup>。こうして聖火は日満華大会が日本という盟主のもとに行われることを象徴的に示したのである。

さらに競技の行われる場も象徴的意義をもっていた。競技場の所在地である南嶺は、清朝時代の1882年に「南嶺大営」と呼ばれる兵営が設置され、満洲事変前夜には東北軍の歩兵、砲兵約3700名が駐屯していた。このため、同地は満洲事変における数少ない激戦地の一つとなった。こうした経緯から、「国都の夕焼空を北に眺めることの出来る南嶺競技場……こゝは国都の戦跡として在満邦人の忘れ得ぬ聖であ」って<sup>110</sup>、「大会場を躍進目覚しき新興満洲国の歴史も深き南嶺総合運動場（大同公園）に於て開催したことは頗る有意義」なことだったのである<sup>111</sup>。ちょうど一年前に日満対抗競技に参加したある日本人選手は、「南嶺の古戦場で東洋平和の積石となつた幾多の英霊が眠る墓石の前では涙を禁じ得ず、そして又更にこの炎天下に聖戦に活躍する我皇軍将士の事が併せ思ひ浮かばれて唯々頭の下るのみ」との感想を残している<sup>112</sup>。

この由緒ある土地に野球場が建設されたのは1933年11月のことで、その後1935年9月までの間に、陸上競技場、ラグビーコート、バスケットボールコート、バレーボールコート、サッカーコート等が次々と整備されていった<sup>113</sup>。日満華大会開催が決まると、国都建設局は「工事期間の不足を顧みず」総合運動場の改造を決定し、7月末よりメインスタジアムの補修工事が始まった。日本の選手団が到着した8月30日にはまだ「多数の苦力が入つて工事進行中」で、フィールドは使えず、トラックのみなんとか使えるという状態であった。それでもなんとか大会開催に間に合わせ、南嶺競技場は電気

108 『満洲日日新聞』1939年8月5日。

109 『満洲日日新聞』1939年9月1日、松沢一鶴「くろがね道中双六」『体育日本』第17巻第10号、1939年10月。

110 河村泰男「待望の日満華競技」『満洲体育』6巻2号、1939年10月。

111 宇佐美太郎「排球」『満洲体育』6巻2号、1939年10月。

112 鶴沢仁三「満洲遠征日記抄」『陸上日本』第92号、1938年9月。

113 満洲国民生部『満洲国体育行政概要』満洲国民生部、1939年、295-296頁。

設備による掲示板やアンツーカーのトラックなど、最新の設備を誇る競技場へと生まれ変わったのである<sup>114</sup>。

日満華大会に際して、国务院総理大臣張景恵は次のような訓話を発表した。

日満華三国はともに東洋の独立国家であり、文化的には同文同種の縁にあり、地理的にはもとより唇齒輔車の分離すべからざる関係にある。試みに世界地図をひもとして三国の形勢を観察してみよう。あるいは東亜の歴史をひもとして数千年来の親密な関係を考察してみよう。そのとき、われら三国の人は相輔相親の感情が自然と胸中に湧き起こって来るであろう<sup>115</sup>。

かつて、極東大会の創始者であるブラウン (Elwood S. Brown) は、極東大会の意義を次のように説明した。「大会は、フィリピン人、中国人、日本人がひとつの共通の基礎のもとに自主的に集まる最初の機会を提供した。宗教、社会生活、ビジネスはいかなる共通の基盤をも提供しなかったが、「プレイ」はそれを提供したのである<sup>116</sup>。」極東大会に参集した三国は、三国全体として政治的、経済的、文化的、社会的、宗教的な共通項を持っておらず、唯一スポーツのみがこれら三国を結びつけた。スポーツによって三国は政治、経済等の側面における断絶を乗り越えることができたのである。一方、日満華三国は、地理的にも文化的にも一体の関係にあり、東亜新秩序という政治的経済的運命共同体として想定されていた。スポーツは三国を結ぶ唯一の糸ではなく、三国を緊密に結びつける数多くの糸の一本にすぎなかった。日満華大会は一本の糸を通じて、東亜新秩序という全体を浮かび上がらせる装置として機能したのである。

日満華大会の競技種目は、陸上、バスケットボール、バレーボール、サッカーの4種目であった。この4種目が選ばれたのは、三国におけるスポーツの現状と、日本の各競技連盟の態度によるところが大きい。まず前者についていえば、サッカー、バスケットボール、バレーボールは「満洲国内に於て<sup>ママ</sup>徒来からも行はれ、今後とも大いに振興

114 中山克己「南嶺総合運動場内陸上競技場に就て」『満洲体育』6巻4号、1939年12月、織田幹雄「技術的に見たる日満華競技報告」『陸上日本』第107号、1939年11月、『満洲日日新聞』1939年8月29日。ただし、観客席の整備は間に合わず、1500人収容のメインスタンドのほかは、芝生のスタンドであった。

115 『盛京時報』1939年9月2日。

116 Elwood S. Brown, "Teaching the World to Play," *The Outlook*, December 28, 1921.

普及をすべき運動競技の種目」と考えられていた。華北ではサッカーが盛んであり、バスケットボールも伝統的に強いチームを有していた。逆に日本が得意とする水泳や野球は華北ではあまり行われていなかった。バレーボールは華南で盛んだったが、華北ではさほど行われておらず、「中華」は当初からバレーボールのチームは出せないと言明していた。そのため満洲国側はバレーボールをオープン競技として実施したいと提案したが、日本側（おそらく大日本排球協会）が、たとえ参加国が日本と満洲国だけであっても正式種目として認めてほしいと強く要請した。満洲国側は逆に野球の開催を求めたが、東京大学野球連盟の拒絶にあった<sup>117</sup>。ラグビーは東京大学チームが来て、満洲国とオープン競技という形で試合をするようになった。この年、文部省は満洲遠征を計画した早稲田や明治の野球部に対して遠征を許可しなかったが、東大ラグビー部の遠征については、「満洲国体協の招聘によるものであり、三国大会の一部でもある」との理由で特別に許可していた<sup>118</sup>。

筋書きのないドラマがスポーツだとすれば、日満華大会はスポーツの競技会というよりはむしろ儀礼に近いものであった（もちろんこれは、個々の競技が真剣に争われたことを否定するものではない）。というのも、日本が完全勝利をおさめることは、ほぼ誰の目にも明らかだったからである。競技的な興味は満洲国と「中華」がどこまで日本に迫れるかにあり、それはとりもなおさず両国がどれほど日本化＝文明化したかを示すバロメータでもあった。以下に見るように、競技の言説はしばしば精神の言説にすりかえられ、技術的な優劣が日本精神の修得度の差に還元された。ただ唯一、不確定要素を挙げるとすれば、「中華」のサッカーであったろう。

サッカーは伝統的に中国が最も自信を持つ競技であった。中国は極東大会で9連覇という輝かしい成績を残している。また、1937年4月に岡部平太の引率で天津の北寧鉄路体育会足球队が来日したときには5戦5勝の成績を挙げていた。今回の中国代表チームはこの日本遠征メンバーを中心に、北京の有力選手を加えたものであった。ただ、

117 『満洲日日新聞』1939年6月24日。野球の競技連盟は大日本体育協会から独立しており、両者のあいだには極東大会時代からたびたび確執を生じていた。

118 『読売新聞』1939年6月29日。早大、明大野球部の満洲遠征不許可については、前日の『読売新聞』で「文部省が今夏は学生の大陸渡航を勤労奉仕のほか一切認めてゐないので野球に限らずあらゆるスポーツの外地遠征は完全に絶望となつた」と報じている。

日本もこのころまでにはかなりの実力をつけており、ベルリンオリンピックでは強豪スウェーデンを下す大番狂わせを演じていた。大日本蹴球協会の小野卓爾は、今回の事変で華北は深刻な戦禍を経験しておらず、日本軍の実力に対する認識が浅いと聞いているとした上で、「スポーツに於いても絶対優勢なる日本民族の力を彼等に周知せしめることは戦後経営の方策上にも極めて重大な関係がある」とし、日本の選手に対して「明確なる世界観と聡明なる時代認識」を持つことを要求した。「中華」との一戦は「何としても圧倒裡に勝たねばなら」ず、同時に精神面でもそうあることが求められていたのである<sup>119</sup>。

大会2日目、雨の中で敢行された日本＝「中華」戦は文字通り熱い戦いとなった。グラウンドは「満々と水をたゝへた楕円形の大きな池の中に所々青い草が顔をだしてゐる」という最悪のコンディションで、両チームの選手にフラストレーションがたまつた。『満洲日日新聞』の報道によれば、「中華」軍RW 孫永泉と日本軍LW 金成珩がトラブルを起こし、前半戦終了直後に、「日華両選手入り乱れての乱闘」となった。試合は3対0で日本が勝利した。試合終了後も「中華」の選手は後半戦の試合時間不足を理由にあわや乱闘に及びかけたが、岡部総監督の慰撫により事なきを得た<sup>120</sup>。「中華」側が不満だったのは反則の解釈であった。「中華」の選手は肩の高さのボールを足で蹴ろうとするが、日本の選手は頭で叩こうとし、ために「中華」がことごとく反則を取られた。岡部によれば、これは習慣からきた差異であった<sup>121</sup>。しかし満洲国の技術代表野村正二郎はこれを「悪意あるファウル・プレー」だとし、「結局人格の問題であり、競技精神に対して持つ指導者並びに選手の神聖観念の度合、徳育の程度を表はすものである」と見た。満洲国にも問題があった。ある中堅選手（東京の大学でも活躍した）は、「対日本戦に於て競技精神に甚しく悖つた行為を繰返し、心あるものをして満洲蹴球の将来の為に、遺憾、憂慮の声を発せしめた」として、野村は満洲蹴球協会に「技術上にも、

119 小野卓爾「東亜協同体の推進力」『体育日本』第17巻第7号、1939年7月。

120 『読売新聞』1939年9月3日、『満洲日日新聞』1939年9月3日。『新民報』特派員の李楨は、「体育道徳」を欠き、日本チームと謂われのない衝突を引き起こすところだったとして李宗禹の起用を失敗の原因の一に挙げている（『（北京）新民報』1939年9月17日）。

121 岡部平太「国際競技と審判」『読売新聞』1939年9月10日。



精神上にも健全なる発達を期」した<sup>122</sup>。

東亜新秩序下における日満華の融和を演出する大会で乱闘騒ぎが起きたことは、大きな汚点となった。読売新聞特派員の川本信正は「サッカーの様な激しいゲームを日華の間で本気にやるのは東洋の新しいスポーツ文化建設のためにまだ少し時期が早過ぎると感じた<sup>123</sup>。」「本気」のゲームは儀礼にはそぐわない。「中華」の選手が真の競技精神を身につけていない以上、両者の試合は徒らに対抗意識を刺激するだけで、友好親善は望むべくもなかったのである。

バスケットボールは日本の勝利が確実視されていた。それは日本が7月に来日した「世界に誇るカナダチームを邀へ撃つて二勝一敗の世界籃球史に輝く一頁を加へ」たからであった<sup>124</sup>。カナダはベルリンオリンピックで銀メダルを獲得しており、その国の代表に勝ち越したことで日本は大きな自信を得ていた。「中華」はベルリンオリンピックにも出場した長身のセンター劉宝成を擁し、速攻を得意とするチームであったが、緒戦で日本に89-43と大敗した。満洲国の鈴江によれば、「中華」チームは「恵まれた体力、跳力は良き指導のもとに精神訓練と籃球技術の再検討をすれば将来強チームとなることは疑ひな」かった。満洲国チームは「五族協和精神の<sup>ママ</sup>強調を主眼として各地よりピックアップした」チームで、日本に33-64、「中華」に48-63のスコアで敗れた。「中華」、満洲国とも防御の研究が欠けており、「世界的日本チームの試合態度精神力技術は満華両チームの見倣ふ可き処」とされた<sup>125</sup>。

バレーボールは日本と満洲国の間で争われた<sup>126</sup>。日本バレーボール界にとって唯一の国際舞台であった極東大会が1934年になくなり、翌年4月に日満交歓競技大会で満洲国と対戦して以来、久々の国際試合となった。最後の極東大会で日本は極東大会史上はじめて中国から1勝を挙げたものの最下位に終わっている。この記念すべき勝利を選手として体験した坂上光男が日本軍の監督である。満洲国の宇佐美太郎によれば、

122 野村正二郎「足球」『満洲体育』6巻4号、1939年12月。この選手が「日本人」であったか、「朝鮮人」であったか、はたまた「満洲国人」であったかは特定されていない。

123 岡部平太「国際競技と審判」『読売新聞』1939年9月10日。

124 鈴江明仁「日満華競技大会予想② 籃球」『満洲日日新聞』1939年8月19日。

125 鈴江明仁「籃球」『満洲体育』6巻4号、1939年12月。

126 「中華」は6月26日に代表選手の選抜を行ったが、結局参加しなかった。



日本チームは「一点非の打ち処のない一心同体、羨しい非常な美しさを感じた、精神的方面に強烈な迫力を有して居た」。学生主体の日本チームに対し、満洲国チームは全員社会人で、しかも言葉の通じない白系ロシア人2人を含んでいた<sup>127</sup>。満洲国は第1回戦の第1セットこそ24-26と健闘したが、あとはほぼダブルスコアで、1セットも取れずに2戦2敗の成績に終わった。

陸上競技は、大会前の予想によると、日本と満洲国の争いになると考えられていたが、「中華」が予想以上に健闘した。なかでも800mの李世明、三段跳の張立三、走高跳の董錦地らの活躍は大いに脚光を浴びた。劈頭に行われた800m、日本の石田が1分58秒8で優勝したが、李世明は満洲国の于希渭にあと一步に迫り、記録的には同タイム(2分0秒5)であった。于希渭は劉長春とともにロサンゼルスオリンピックの満洲国代表に指名された人物で、中距離界の第一人者であり、得意の1500mでは圧勝した。三段跳はベルリンオリンピックの銀メダリスト、原田正夫が15m09を跳んで快勝、張は14m77を跳び堂々の二位に輝いた<sup>128</sup>。李と張の記録は「中華」新記録であった。走高跳は日本の第一人者秋間哲雄が1m88で優勝し、董が1m85で続いた<sup>129</sup>。陸上競技はコンディションの悪さに苦しみ、記録的には散々であった。最終成績は日本が131点、満洲国が99点、「中華」が51点であった。

織田監督によれば、「得点の上では実に苦もなく日本の勝利となつてゐるが、後半は兎も角前半の競技は意外に苦しめられた。」その理由は「二位に満、中両国に喰ひ込まれ」たからであり、なかんずく「中華」の意外な活躍は大きな誤算であった。最後の極東大会、陸上競技(団体を除く)の成績は日本101点、フィリピン57点、中国7点であったことを考えると、まったくそれは大きな「誤算」であった。これに対して、満洲国は得点の上では健闘しているが、織田は「予想外に弱かつた」と厳しい評価を下している<sup>130</sup>。満洲国の齋辰雄監督によれば、敗因は無理なスケジュールと「精神力の欠如」であった。齋は「五族の青年選手が一つの大会を目指し、心を合せて精進火の

127 宇佐美太郎「排球」『満洲体育』6巻4号、1939年12月。

128 原田が7月30日の予選で出した記録は15m73であった。

129 秋間は8月26日に大連で行われた歓迎大会で1m97を跳んでいる。

130 織田幹雄「技術的に見たる日満華競技報告」『陸上日本』第107号、1939年11月。なお日本陸上陣の精鋭5名は大島鎌吉監督のもと、ドイツに遠征中であった。

様に燃ゆる事が如何に困難であるか」を思い知らされた。具体的には、白系の選手は生活習慣やスポーツに対する観念が全く違い、満系の選手も競技に対する観念は「東洋的〔＝日本的〕であると云へない点が多々」あり、朝鮮の選手は「大きな競技会に安心し出場せしめ得ない心の糧の不足が痛感され」た。満洲国のスポーツ界は爾来、スポーツこそが民族協和を実現する最良の手段であると考えてきた<sup>131</sup>。しかし今大会は、理想と現実のギャップを浮かび上がらせることになった。「満人」の観客たちが応援したのは、満州国ではなく、「中華」だった。

先づ満州国選手といふのがほとんど彼地に於ける日本人だから、それらが仮令美技を演じてもさして満洲国人の喝采を博さず、「中華」の選手が日本選手に迫った時などには、満人の応援喝采が物凄かつた<sup>132</sup>。

9月3日午後7時15分、南嶺競技場で閉会式が挙行された。集まった観衆は5万。師道高等学校女子学生によるマスゲーム「カマリンスカヤ」、日満の女子中等学校学生によるマスゲーム「ボルカセリーズ」、日本の男子中小学校学生による集団競技と満洲建国体操に続いて、日満華の選手がそれぞれの国旗を先頭に入場した。張景恵大会総裁から優勝杯が授与されたが、数あるトロフィーはすべて日本軍の手に帰した。ついで星野直樹大会副総裁が「三国選手を送るの辞」を読んだ。

蓋し今回の交驩大会は之実に今や建設の途上にある新東洋の先駆であり又其の縮図であります。……新東洋は豪雨と泥濘との中に建設せられつゝあるのであります。而も我々は此の豪雨と泥濘とを冒して其の建設を成就し、やがて今日の如く最後には秋天晴れわたりたる中に其の動かざる雄偉なる姿を現出するに至ることを固く信じて居るものであります。而して今回の大会は即ち其の輝しき予言であると思ひます<sup>133</sup>。

131 たとえば田中真茂「協和とスポーツの教養的意義」『満洲体育』5巻1号、1938年5月。

132 松岡謙「スポーツ界雑記帳②」『読売新聞』1940年1月9日。この点に関して、山川益男は「まさか満人が王道楽土大満洲帝国に反感を持つ訳はなし。蹴球でも、陸上でも注意して見るとさうだつた。これは実に変なことである」と楽天的な感想を残しているが（「没法子遠征記」『体育日本』第17巻第10号、1939年10月）、多くの日本人は蹴球監督の竹腰重丸のように、これを批判的に見たことであろう（「日・満華交驩競技遠征所感」『体育日本』第17巻第11号、1939年11月）。

133 星野直樹「三国選手を送るの辞」『満洲体育』6巻4号、1939年12月。

満洲建国の歌の合唱に続いて、興亜聖業犠牲の英霊に対し黙祷が行われた。東京六大学野球や夏の甲子園など、日本のスポーツの競技会で黙祷が行われるようになるのは1938年に入ってからである。1939年7月に発表された大会プログラムには黙祷が含まれていなかったが、いつの間にかプログラムに入れられた。黙祷は日満華大会という「平和の祭典」が軍事的に達成された「平和」のうえに成り立っていること如実に示していた。こうした儀式が平然とプログラムに入れられること自体に、「国際」競技会としての日満華大会の特異性をうかがうことができよう。黙祷のあと、三国の国旗が下ろされ、選手たちは「蛍の光」の合唱に送られて退場、最後に神吉大会会長の閉会の辞があり、午後8時20分、3日間の戦いの幕が閉じられた<sup>134</sup>。

それから2日後、同じメンバーが奉天国際競技場に集った。奉天では2日間にわたって日満華奉天大会が開かれた。織田幹雄陸上監督が「新京の競技から一日を置いて奉天で同じ形式の競技をやらせられる事は疲れた選手には少々有難迷惑の気味」があったと言うように、両大会は全くの繰り返しであった。さらにいえば、日満華大会自体が一連の競技会の一部でしかなかった。8月19日から京城で満鮮對抗競技大会、26日に大連で日本選手団歓迎競技大会、新京・奉天の日満華大会を挟んで、9月8日から新京で第8回全満洲体育大会があり、9日から京城で日満華大会華北代表を招いて鮮華對抗綜合競技大会が開催された。後者の競技会は下村宏が「日韓併合後いかに朝鮮の文物が面目を一新」したのかを「中華」の選手に見せようと持ちかけたものであった<sup>135</sup>。一方、日本選手団は行く先々で忠霊塔、神社に参拝、8月28日には旅順にまで足を伸ばし、二百三高地を訪れている。スポーツを通じた「巡礼」は、こうして東亜新秩序の幻影を各地にばらまいたのである。

### 第三章 戦時下スポーツの諸相

#### 第一節 日本スポーツ界の逆境

ベルリンオリンピック、日中戦争を経て、自由主義スポーツを謳歌していた日本ス

134 『盛京時報』1939年9月5日、『満洲日日新聞』1939年9月3日。

135 織田幹雄「技術的に見たる日満華競技報告」『陸上日本』第107号、1939年11月、下村海南「日満華交驩競技大会」『体育日本』第17巻第10号、1939年10月。

スポーツ界にも、新しい動きが現れつつあった<sup>136</sup>。1937年5月のワルシャワIOC総会に参加する副島道正に随行した李相伯は、帰国後にIOC内部で国家スポーツと自由主義的スポーツが対抗しつつあることを紹介し、「「強制するものは体操であつて自発的のものはスポーツである」という単純な意識も種々の注釈を必要とする時代となつてゐる」と論じた<sup>137</sup>。11月23日には大阪毎日新聞社主催の国防スポーツ第一回競技大会が開催された。「国防スポーツ」なるものは、この時始めて作られたものである。

同じ頃、大日本体育協会では新たに下村宏が会長に就任し、組織の拡大強化を図る方針が決まった。『大阪毎日新聞』によれば、それは「従来の自由主義的スポーツ指導精神の清算乃至転換であつて統制的社会体育運動の中枢機関と化する」もので、将来的には「専らスポーツ国策の実施にあたる」はずであった<sup>138</sup>。人口問題の専門家でもある下村によれば、それは従来の競技本位第一主義から国民体位向上へと重心を移すことであった<sup>139</sup>。国民体位への関心は、ベルリンオリンピックの前、正確には1936年5月15日に、陸軍省医務局長小泉親彦が国民体位の低下を指摘したことに、その淵源を求めることができよう<sup>140</sup>。大谷武一はスポーツ界のこうした傾向について、数年前までなら、「国際主義に霊まで奪はれてゐる、所謂スポーツ人」から馬鹿にされた国民体育向上の議が、そのスポーツ界から出されたのは、一つには国民精神総動員が影響していると述べている<sup>141</sup>。

しかしながら、日本のスポーツ界が一気に国家主義スポーツに衣替えしたわけではない。大阪毎日新聞社運動部の大島謙吉(ロサンゼルスオリンピック銅メダリスト)は、国防スポーツを解説するのに、その総本家たるドイツだけでなく、イギリスとアメリ

---

136 ベルリンオリンピックの日本への影響については、中村哲夫「ナチス・オリンピックと日本——近代日本オリンピック史の一断面」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』第45巻、1994年を参照。

137 李相伯「国家スポーツ」『大阪毎日新聞』1937年10月17日。

138 『大阪毎日新聞』1937年11月26日。高岡裕之「大日本体育会の成立——総力戦体制とスポーツ界」『幻の東京オリンピックとその時代』は、1936年12月に大島又彦陸軍中將が大日本体育協会会長に選出されたことを、「国民体育」団体への転換点とみている。

139 『大阪毎日新聞』1937年11月30日。

140 川本信正「日本スポーツの反省(上)」『体育と競技』第18巻第3号、1939年3月。

141 大谷武一「体操界の回顧」『体育と競技』第16巻第12号、1937年12月。

カの事例を挙げてそれを正当化しなければならなかった<sup>142</sup>。日本ではなおも自由主義スポーツが力を持っていたのである。

文部省体育官小笠原道生は1938年全国中等学校優勝野球大会（いわゆる夏の甲子園大会）の茶話会で、「むしろ今日のやうな場合に於てこそ、今日のやうな非常時局下にあつてこそ、運動競技はこれを一層に奨励すべきであつて、これによつて強健なる青少年の身体を鍛へ、進取必勝、不撓不屈の精神を養ひ益々軒昂たる国民精神の發揮に努めることが、最も肝要なのであります」と挨拶した<sup>143</sup>。また、彼は戦時下の外来スポーツのあり方について、「昔から日本にある運動種目でも之を行ふ心掛が悪ければ、日本精神に反する結果となる事もある訳であり、又、仮りに西洋に生れた運動種目であつても遣方に依つては最も日本的な精神で行ふ事も出来る筈であります」と弁護している<sup>144</sup>。しかし、のちに小笠原が体育課長、そして体育局長として学生スポーツ統制の当事者となっていく事実が示すように、外来スポーツはますます困難な立場に追いやられつつあった。

スポーツの統制は、武道の奨励の裏返しでもあった。1938年2月に衆議院で一連の武道振興に関する決議案が可決された。翌年3月、明治神宮体育大会が厚生省に移管されるのに伴い、厚生省体育運動審議会で大会の方針や実施種目が改めて検討された。大会の方針は、「御祭神ノ大前ニ国民ヲシテ平素ニ於ケル心身鍛練ノ成果ヲ奉納セシメ、進ンデ現下ノ難局ヲ打開シ、東亞新秩序建設ノ礎石タルノ覚悟ヲ誓ヒ奉リ、真ニ国民精神総動員ノ具現タラシム」と謳われ、新たに国防競技と集団競技が採用された。この審議会委員の一部は「武道尊重論」を主張し、外来スポーツを日本精神のヌケガラであるかのように扱い、「何か時局的なイデオロギーを製造しようとあせつてみた厚生省当局」はこれを高く評価したという<sup>145</sup>。このように日本国内では「欧米依存主義排斥」の声の下に、柔剣道のみを日本精神なりとして尊重したり、時代的色彩とでも申すか、

142 『大阪毎日新聞』1937年10月26日。

143 小笠原道生「時局下の体育とスポーツ」『学校体育』第20巻第6号、1939年1月。小笠原は和歌山中学時代に第一回の甲子園大会に出場している。

144 小笠原道生「体育家に贈る（二）」『体育と競技』第18巻第5号、1939年5月。

145 入江克己『昭和スポーツ史論——明治神宮競技大会と国民精神総動員運動』不昧堂出版、1991年、第5章、川本信正「混乱と秩序：今年のスポーツ界回顧」『体育と競技』第18巻第12号、1939年12月。



国防競技と称するものが生れたりして来るのが最近の世相に現れ」ていた<sup>146</sup>。

東京オリンピック開催権の返上がスポーツ界にもたらしたインパクトは大きかった。もちろん政府はこの決定によってスポーツを否定したわけではない。木戸厚相はとくに「オリンピック大会を取り止めることが総ての体育運動を軽視するものであるかの如き感を国民に与ふることがあつては甚だ遺憾」だと言明している。しかし東京オリンピックは戦時下のスポーツを正当化する最大の根拠であった。東京オリンピックの中止は、スポーツ界にとって、スポーツに対する政府のお墨付きを失ったことを意味した。李相伯は大日本バスケットボール協会の機関紙で木戸厚相の言明をひきつつ、「況してや体育と競技の事業は此時局下に遠慮すべきものであるといふのでは更にないことである。否、却つて斯かる時局下にこそ、国民体育の振興が従来の幾倍幾十倍も必要である」と「国民体育」の意義を確認した上で、「我が協会が各競技者に、銃を執つて戦場に立つ瞬間まで球を手より離すことなかれ」と強く要求した。こうした強い姿勢から、逆に大日本バスケットボール協会の置かれた困難な立場をうかがうことができよう<sup>147</sup>。

日本スポーツ界はこの逆境にいかに対応すべきか。一つの回答が、すでに見てきたように「国民体育」へのシフトであった。ただ、先述の大谷の言葉に見えるように、「国民体育」運動はスポーツ界が首唱したものではなく、スポーツ界は主導的役割を果たすことはできなかった。もう一つの回答が、戦争に直接貢献することをアピールすることであった。「国防スポーツ」の創出がそれであり、また良きスポーツマンが良き戦士であることが盛んに強調された。1937年10月から『東京朝日新聞』に連載された「スポーツマン奮戦録」はそうした試みの最初のものであり、同種の企画は1939年の「戦線のスポーツマンから」や1940年「戦争とスポーツマン」で繰り返される。日中戦争勃発直後、安川伊三は戦時下のスポーツに関して次のようにいった。

146 鈴木武「大陸とスポーツ」『陸上日本』第103号、1939年8月。日本敗戦後のアメリカの占領政策は、ちょうどこれを裏返したものとなった。

147 李想白「オリンピック東京大会中止とその後に来るもの」『籠球』22輯、1938年9月。日満華大会後の1939年10月10日、同月末に開かれる第十回明治神宮国民体育大会に天皇が行幸するとの申し出が宮内省からあり、スポーツ界の懸念は一時的ではあったが、取り除かれることになる。



幸にも世界に周知の名選手達が出征の栄を荷ふ様な事があつて、抜群の戦功を立てとるか、万一戦場の露と消える様な事が起れば、国民一般のスポーツに対す考、ひいては政府のスポーツに対する態度も、現時とは亦もつと変つたものになつて来るに違ひない。スポーツ名選手の戦死！それは全世界にセンセーションを起すに違ひない<sup>148</sup>。

戦時下のスポーツの価値とは何だらうか。「スポーツ」をかりに「ダンス」や「演劇」に代えてもこの文章は成り立つ。安川によれば、スポーツを正当化するのは戦争への貢献度（その最大のものが死）であり、けっしてスポーツそれ自身がもつ価値によつてではなかつた。もちろんこれは極端な例であり、スポーツマンが戦場でいかに役に立たないかという批判を受けて、具体的にスポーツの効用をとくものもいた。ただ全体的にいって、スポーツ界は受動的であつた。スポーツ界の逆境は、資金不足と並んで、日本で日滿華大会が開けなかつた大きな原因の一つであつた。

朝鮮でも日本と同様の事態が進行していた。その契機となつたのが、1939年3月18日に開かれた朝鮮体育協会主催の「国防と体育に関する座談会」であつた。座談会に参加したのは朝鮮体育協会に所属する競技団体代表、軍部、政府の教育関係者であつた。「筋金入りの皇道主義者」「半島のヒットラー」とも呼ばれた鹽原時三郎は、スポーツの統制に否定的なスポーツ関係者の議論にしぶれを切らし、「体育の目的は最高の戦力を獲得するにあり」「国家が体育を奨励するは戦力増強せんとするが為なり」という標語を認めさせ、これを「金果玉条<sup>ママ</sup>として体育をやつて行く」よう求めたのである。西尾達雄はこの座談会を「司会の鹽原学務局長（朝鮮体育協会会長）によつて「個人の興味」としてのスポーツを否定し、会全体を「戦力増強」の方向に強引に巻き込んでいった会議」と位置づけている。ここで「承認された」方針は、やがて全朝鮮の学校教育の場で実践されていくことになる<sup>149</sup>。

148 安川伊三「体育漫語」『体育と競技』第16巻第10号、1937年10月。軍関係者のスポーツに対する態度は、「国防と体育座談会」（『体育日本』第17巻第4号、1939年4月）によく現れているように、現状のスポーツには総じて否定的であつた。

149 西尾達雄『日本植民地下における学校体育政策』明石書店、2003年、461-464頁。

## 第二節 植民地・占領地政策としてのスポーツ

一方、満洲国や華北では違った展開が見られた。スポーツには特殊な用途があったからである。日満華大会の副総裁をつとめた星野直樹は、非常時におけるスポーツを積極的に肯定していた。

体育運動と云ふものと非常時と云ふものとが如何にも背馳的のものに見え、そう云ふ外観を呈するが実は非常時であればある程体育と云ふものを重んじなければならぬ、動員に直ちに關係ないやうな体育と云ふものが、実は動員と云ふものを有力にする基礎として非常に重要であると思ふ。……体育の為の競技制度、殊にチャンピオン制度は、私はちつとも悪くはないと思つてをります<sup>150</sup>。

また、スポーツは占領政策としても有効であると考えられていた。「大陸のスポーツ界に望む」と題した座談会で、大日本体協常務理事の李相佰はドイツの事例を挙げて次のような主張を展開した。

先程独逸がオースタリイ<sup>マ</sup>を併合すると、もう一週間も経たない中にゲーリング〔Hermann W. Göring〕がドイツ軍を引つれて乗込むと同時にドイツの体育長官チヤムマーウント・オステン〔Hans von Tschammer und Osten〕と一緒に乗込んでゐる、そしていちやく壠太利の体育協会を独逸の体育協会に合併した、そして直ちに大ドイツ一周自転車選手権大会といふのをやり、壠太利を合した大ドイツ一周の競争に自分で先頭に立つてかけまわつて全コースを歩いてゐる。これはその地方に最も普及した競技を利用して新しく生れた大ドイツ即ち独壠一体感を一般に感情に植込むことに利用してゐる。こんな態度は今の日本の為政者は誰一人想像も出来ぬことでせう<sup>151</sup>。

同じ席上、大日本体育協会総務部委員の北沢清も「移住政策や、植民政策には体育運動殊に青少年に親しみのある、スポーツは立派な政策になると思ひます、英国は十八世紀より十九世紀に掛けて、植民政策を実行して来たが、そこには悉くスポーツを結びつけて居るのです」と言つて、植民政策としてのスポーツの意義、とりわけ満洲国

150 「非常時と満洲国体育を語る」『満洲体育』6巻1号、1939年3月。

151 「大陸のスポーツ界に望む」『満洲体育』6巻2号、1939年10月。

で「日本化したスポーツ」を普及させることの重要性を説いている。

李相佰は座談会の直後、1939年7月から、在外特別研究員として北京に滞在することになる。李は北京で文化工作としてのスポーツの重要性をよりいっそう実感し、「事変処理とスポーツの文化的使命」と題する文章でそれを強調した。文化工作、人心把握の手段は、露骨に政治的なものや、手段のための手段では相応しくない。スポーツが「純真性」をもつこと、さらに中国ではすでに広汎なスポーツ愛好熱が存在することを考慮すれば、スポーツは文化工作の手段にふさわしい。それを通じて、「興亜建設の礎石たるべき心身の強化を成就して、信頼と自尊の念を醸成すること」がいまもっとも必要である、と<sup>152</sup>。李はその後、朝鮮独立運動家として有名な呂運亨に会い、朝鮮独立運動への関与を深め、1944年10月には建国同盟に加入した。これは歴史の皮肉と言えようか<sup>153</sup>。

以上から、日満華大会がなぜ日本で奨励されていた武道や体操ではなく、「外来スポーツ」の大会として挙行されねばならなかったかが理解できる。武道や体操はあまりにも深く「国民」と結びつきすぎており、植民地政策、占領地政策の目的を果たしえないからである<sup>154</sup>。

日満支間の友好関係は当然スポーツに依つて為されるのである。尚又日本が日本伝統のスポーツにのみスポーツを限るとして満洲、支那に之を同化せしめようとするならば、世界史上同化政策の悪政なることは誠に明かなることにして東亜協同の意義たるべき協同の精神に抵触するものであつて斯くの如き点よりしてもスポーツの存立は認められるのである<sup>155</sup>。

日満華三国を結ぶことのできるもの、それは「外来スポーツ」において他にはありえ

152 李想白「事変処理とスポーツの文化的使命」『東京朝日新聞』1940年1月8-10日。

153 李相佰については想白李相佰評伝出版委員会・韓国大学籠球連盟編『想白李相佰評伝』乙酉文化社、1996年に詳しいが、彼が一時期国家主義スポーツのイデオログだったことには一切触れられていない。李は戦後、韓国のIOC委員、またソウル大学教授として活躍した。

154 武道の国際大会の参加者はほとんど日本人であった。唯一の例外は1940年5月に開かれた東亜武道大会であろう。体操に関していえば、日本には大日本国民体操、華北には新民体操、満洲国には満洲建国体操、朝鮮には皇国臣民体操等があったが、いずれもそれぞれの民族・国家と結びつけられており、その範囲を越えて実践されることはなかった。

155 「日本代表合宿現地報告」『蹴球』第7巻第5号、1939年5月、4頁。

なかった。それは後発の帝国主義国家であった日本にとって、必然的な運命であった。植民地・占領地における日本の言語政策を論じた石剛は、日本に「たとえば近代科学、技術に代表されるいわゆる物質文明、そしてたとえばキリスト教などのような、普及に堪えるだけの世界宗教、および近代社会に適応した精神面の文化をなにも一つもちあわせていなかった。その欠如のためか、植民地経営に乗りだしたときに、つねに無力感と劣等感につきまといわれざるをえなかったようだ」と指摘する<sup>156</sup>。実際、岡部平太は日中戦争前の状況について、「支那事変以前、いわゆる新中国の指導的立場にあった中堅知識層に於ては、日本文化の全面に対して皮相な観察を下し、日本文化を以て模倣文化と見なし、ひたすら独断的、一方的である米英文化に追随し、その徒らなる直接模倣を以て日本文化を見下し、以て得々たるの状態であったことを筆者は長らく蔑視しながらも堪えて来た」と証言している<sup>157</sup>。それゆえ、スポーツに限らず、文化工作一般で日本精神が過度に強調されることになる。満洲国の鈴木武は次のように述べている。

今日の時代は日本人は日本精神を基調としたインターナショナル的な存在の人物でなければ到底大陸政策への進展は期せられない筈である。インターナショナル的なスポーツに日本精神の発露を見出してこそ、我等のスポーツは国策的であり、且つ貢献するところ大であらうと信じたいのである<sup>158</sup>。

日満華大会をもっとも強く望んだのが大陸の日本人であったというのも、至極当然のことであった<sup>159</sup>。華北新民会の菅井浩は日満華大会の意義を次のように語った。

中華人は非常にスポーツの好きな国民性を持つてゐるが、米国流の享樂的なところが強くスポーツによる精神の陶冶と云ふ点を没却してゐる傾向があるから三国競技に於て日本選手の態度を見習はしたいと期待してゐる<sup>160</sup>。

156 石剛『植民地支配と日本語：台湾、満洲国、大陸占領地における言語政策』三元社、2003年、19頁。

157 岡部平太『スポーツ・勝負・人間：岡部平太遺稿集』同書刊行会、1968年、93頁。

158 鈴木武「大陸とスポーツ」『陸上日本』第103号、1939年8月。

159 一方、下村会長は「本大会の第二回を出来るだけ日本で開催する様努力したいものである、と云ふ様に消極的な言葉でこの問題をとりあつかうっていたという（齋原雄「満州代表選手の技術的な経過と戦績に就いて」）。

160 『東京朝日新聞』1939年4月5日。

満洲国の田中真茂もまた次のように言う。「開催趣旨から見て東洋の盟主である日本しかも文化に体育にあらゆる施設の完備した東京で開き満支の若人たちに種々の施設を見学させ日本をよく認識させたい<sup>161</sup>。」同様の期待は、もっと広い範囲で共有されていた。1939年1月の『学校体育』誌上で、「新東亜建設下の体育方法を如何にするか」という論文の募集が行われ、第三席に入選した青島市日本第二小学校訓導馬渡良正は、4つの「支那体育目標」を挙げた。そのうちの一つは、中国人は「精神を解く前に官能を刺戟し欲求する物を与へねば体得できない」から「先づ何より日本人の実力を彼等に見せる事」「日本の科学の力と体力と精神力を彼等の目前に表す事」が必要だということであった。大陸の日本人たちは、日本の権威を渴望していた。日満華大会は満華両国の将来を担う青年たちに日本の優秀さを見せつけ、東洋の盟主としての日本の地位を確認するために是非とも必要だったのである。

満洲国も華北もスポーツを積極的に利用したが、「ナショナル・チーム」をいかに構成するかという点において、両者の方針は根本的に違っていた。満洲国は「五族協和」を体現するようなチーム構成を取った。日本にも朝鮮人や台湾人が参加していた。このような民族の混淆は、下村宏にとっては「新東亜の建設をモットーとしている吾々には或暗示といふか示唆といふか、いかにも打とけた懐しみを感得せずには居られない」ものであった<sup>162</sup>。一方、「中華」の選手はすべて中国人で構成されていた。岡部平太総監督によれば、「われ\の方針は原則として北支青年のみでチームを組織してゆかうといふので在北支の日本人のスポーツは又別個に考へてゐるところに或る意義を感じてゐる」た。ただ実際には、織田が「中華チームは台湾から転じた選手が中心」と指摘する通り、張立三、董錦地らは台湾出身であり、「北支青年」のみで構成されていたわけではない。しかし純粹の日本人は選手のなかに含まれておらず、このことがチームとしての一体性を高め、満洲国の齋監督をして、「中華」軍には「全員一丸となつて肉薄して来た気概」があったと言わしめたのである<sup>163</sup>。

「中華」代表は、選手だけでなく、主要な役員も中国人が担当していた。団長は宋介

161 『満洲日日新聞』1938年10月1日。

162 下村海南「日満華交驛競技大会」。

163 『満洲日日新聞』1939年6月30日、齋辰雄「満洲国からの報国」『陸上日本』第107号、1939年11月。

(新民会中央指導部教化部長、華北新民体育協会副会長)、陸上競技監督は劉長春<sup>164</sup>、バスケットボール監督は張守義、サッカー監督は王馨吾であった。実務関係は総務主事の菅井浩、会計庶務の木村静雄ら日本人が多くを占めたが、それでも役員全員が日本人であった満洲国とは好対照をなしている。

中国人を表に立てるという原則の唯一の例外は、「中華」代表を「北支青年」のみで組織するといった岡部平太自身である。この点に関して岡部は次のように弁明した。

このたびの中日満運動会華北代表隊はもともと中国人の団体であり、わたしは最初監督になるつもりはなかった。いま望んで監督となったのは、二つの理由がある。一、私は中国、日本、満洲三国の体育界の状況に最も通じている。二、今回の大会の目的は、東亜新秩序を建設し、中日満の青年が手を取り合うのを促すことにある<sup>165</sup>。

岡部はのちに1940年開催予定の興亜体育大会に対して、「純粹の満洲国人（日本から行つた者ではない）と中国人の実力が充実して来」なければならないと注文をつけた<sup>166</sup>。彼らの実力がつくことではじめて「東亜新秩序を建設し、中日満の青年が手を取り合うのを促す」ことが可能となるのだ<sup>167</sup>。しかし満洲国で活躍していたのは日本人ばかりであり、しかもその多くは学生時代に日本で活躍した人びとであった。彼は中国スポーツ界の実力向上を真剣に望んだからこそ、総監督就任前からすでに国際田徑訓練班のボランティアコーチをつとめ、「軍電一本飛ばば何時でも北京を離れなければならない」状況にあって「陸上競技一つのコーチさへ六ヶ敷いのに蹴球も籃球もその編隊もコーチも引受け」たのである<sup>168</sup>。岡部は大会直前に行われた合宿で、精神講話をおこない、必勝の信念を持つことの大切さを説いた。この点は岡部が平素から強調していたことで、中国人に対しても、日本人と変わらぬ指導をしていたことがわかる<sup>169</sup>。

---

164 劉長春は中国で最初のオリンピック選手であり、またその参加に至る経緯から、中国では英雄視される人物である。かれが一時期、日本の占領下における北京で、スポーツ事業に関与していたことはほとんど知られていない。

165 『(北京)新民報』1939年8月2日。

166 岡部平太「興亜体育大会への態勢(中)」『読売新聞』1940年1月2日。

167 『(北京)新民報』1939年8月2日。

168 岡部平太「北支の陸上陣を語る」『陸上日本』第102号、1939年7月。

169 「必勝之信念与其鍛練方法」『(北京)新民報』1939年8月7、8日。



岡部が東亜新秩序に大きな期待を寄せたのは、石原莞爾の影響が大きいと考えられる<sup>170</sup>。岡部は中国人とできるかぎり対等に付き合おうとした。これは菅井らが「日本人は優秀で、中国人は劣等だ、優秀なものが劣等なものを指導するのは当然だ」という観念で「政治運用の運動会」ばかり組織していたのとは対照的であった<sup>171</sup>。岡部はこの時期、「崗和平」という中国名を使っていた<sup>172</sup>。あえて中国名を使用し、かつ「和平」と名乗ったことに、彼の信念と立場をかいま見ることができよう。

彼が総監督を引き受けた理由として、もう一つ考えられるのは興亜院との関係である。日満華大会開催にあたって、最も多くの資金を提供したのが興亜院であった（下表参照。ただし入場料は含まれていない）。中国代表団の派遣にあっても、興亜院華北連絡部が軍当局、臨時政府とともに後援しており、代表団は出発に先立って、特務部、軍司令部、興亜院、市政府、日本人居留民団を訪問している<sup>173</sup>。当時の興亜院華北連絡部長官は喜多誠一中将であった。1939年2月以前、喜多は天津の特務機関長をしていたが、1938年10月から1939年10月にかけて、岡部は天津特務機関に所属していた。こうした関係から、岡部の総監督就任に喜多の意向が関与している可能性もある。

表 日満華交驪競技大会収支決算 収入の部（単位：円）

興亜院助成金	5000
南満州鉄道株式会社助成金	3000
日産会助成金	1000
関東州体協補助金	1500
満洲国体聯補助金	1300
大連市観光補助金	150
満体奉天支部補助金	315
預託金	657
体協負担金	2000
合計	14922

（出典：『大日本体育協会史』補遺、148頁）

たしかに興亜院は日満華大会を資金面で援助し、スポーツ界は熱心に文化工作とし

170 石原と岡部の関係については、拙稿「戦争・国家・スポーツ」を参照。

171 安田光昭『あの人この人 私の交友録』同書刊行会、1980年、276頁、丸三郎「北京だより」『陸上日本』第105号、1939年9月。

172 『(北京)新民報』1939年5月19、27日。

173 『(北京)新民報』1939年8月12、21、22日。

てのスポーツを推進しようとしていた。しかし、当局の認識は十分ではなく、スポーツが文化工作のリストに入ることはあまりなかった。岡部自身、「戦争に対して文化の力は弱いといふこと」を痛感していたし、李相佰は「現在北支地方ではゆるゆるの体育運動の指導機関としては、新民会に体育協会があつて、乏しき中にもよく努めてゐるやうではあるが、あの程度の規模と内容をもつてしては、時々刻々に相次いで起る事実の処理にさへも十分に対応しきれないであらう」と、文化工作としてのスポーツの限界を指摘している<sup>174</sup>。日満華大会終了直後、岡部は次のような感想を発表した。

競技そのもの、質的検討よりも、更に高度なる政治的視野に立つて考へれば感慨無量なるものがある……東亜青年の堅き結合を築き得たと云ふ感はお互ひに三国青年の胸奥に響くものがあるであらう……北支に居て見聞して居ると所謂東亜新秩序の名に於て日本から各種のことが試みられて居るが、最も堅実な青年層の提和融合の機会としてこの企ての将来の発展を祈るものである<sup>175</sup>。

この時点では、なお東亜新秩序の確立にスポーツが貢献しうる可能性について夢想することができた。しかし1941年初頭になると、岡部は日満華大会と1940年の東亜大会がともに「明かな失敗」であつたと論じるようになる。

もつと根本的な原因を衝くならば所謂共栄圏内の全般的な政治情勢が体育界の人々が考へて居る様に生優しいものでなかつたという理由に帰せられなければならないと思ふ。……名前は全中華民國代表であるが實質は北京天津の僅な愛好者の中から緩慢な予選によつて選抜された七、八十名の選手団に過ぎない、それ以外に方法がない中華民國の現状でありそれを以て主催者が企図する東亜共同体若くは共栄圏の一翼と考へなければならぬ処に計画全体の根本的錯誤が伏在して居た、体育と云つても所詮は政治に附いて動いて行く。体育によつて政治が動く性質のものでない。共栄圏体育の確立と云ふ問題も亦従つて共栄圏政治の抽象的理念が具体化する時に於て始めて具体性をもつて来る<sup>176</sup>。

日満華大会の最大のフィクションは、「中華」であつた。満洲国も一地方の傀儡政権で

174 岡部平太「中華の備へ」『体育日本』第17巻第7号、1939年7月、李想白「事変処理とスポーツの文化的使命（下）」『東京朝日新聞』1940年1月10日。

175 岡部平太「三国競技会所感」『満洲日日新聞』1939年9月9日。

176 岡部平太「春待つ中国体育界」『東京朝日新聞』1941年1月6日。

あったが、なお国家の体裁を備えていた。それに比して、「中華」は国家の体裁すら備えておらず、そのチームも実質的には北京と天津を代表するチームでしかなかった。日満華大会はこうした現実を覆い隠し、東亜新秩序という実体のない政治的スローガンを可視化してみせた。岡部平太が苦悩したのは、そこに実体を求めたからにほかならない。竹腰重丸のいうように、「王道楽土や東亜新秩序は何年、何十年かを費して建設されやうとする将来の理想であつて完全に実現された事実ではな」かった。今後の競技会は「真剣な現実の事態から遊離した所謂オリンピックイデオロギーに立脚して」はならないと竹腰は論じたが、スポーツの効用は、「真剣な現実」を覆い隠すことにこそあるのであり、占領地スポーツはますます政治宣伝の道具と化し、形骸化の度合いを深めていったのである<sup>177</sup>。

## おわりに

ロサンゼルスオリンピックとベルリンオリンピックの中間年に開催された極東大会が、満洲国をめぐる日本と中国の対立により解消されたことは、ある意味で象徴的な出来事であった。政府がほとんど関与しなかったロサンゼルスオリンピックから、あらゆる面にわたって政府が主導したベルリンオリンピックへと、この4年間にスポーツと政治の関係には大きな変化が起こっていた。極東大会の解消は、この変化の前触れであった。

東洋大会は、基本的に極東大会の枠組みを継承したが、1930年代には極東大会が当初持っていた意義の多くはすでに失われていた。極東大会の最大の役割は国際オリンピックへの橋渡しであった。日本ははやくも1912年のストックホルムオリンピックに参加したが、世界の壁は厚く、1920年のアントワープオリンピックでの惨敗もあって、極東スポーツ界で切磋琢磨することを選んだ。そのかいあって、日本人選手はやがて世界の第一線で活躍するようになる。中国では、1922年に王正廷がIOC委員に選ばれたものの、オリンピックに選手を派遣したのは1932年になってであった。このときは選手1名、役員1名であったが、4年後のベルリンオリンピックには大選手団を派遣

---

177 竹腰重丸「日・満華交驩競技遠征所感」。

した。フィリピンは1924年に初参加し、1928年には水泳で銅メダルを獲得、1936年にはバルガスがフィリピンで最初のIOC委員に選ばれた。このようにそれぞれの国が国際オリンピックと直接結びつくようになった以上、国際オリンピックの地域版としての極東大会は歴史的役割を終えていたのである。また1930年代には、それまで陸上と水泳だけに突出していた日本が、あらゆる競技に実力をつけ、中国とフィリピンをはるかに凌駕するに至った。こうした状況は競技面における東洋大会の意義を著しく貶めることになった。参加国が総合優勝を競う選手権大会の形式は、日本の突出した競技力のまえに、ほとんど意味のないものとなっていた。

東洋大会はその不幸な成立の経緯により、極東スポーツ界に拭いがたい汚点を残した。東洋体育協会は、東洋大会の権威不足を補うべく、IOCに頼ろうとしたが果たせなかった。国際社会から孤立していた日本は、IOCの権威によって東京オリンピックに東洋諸国を招くことができたが、東洋大会には、中国はおろかフィリピンさえも招くことができなかった。結局、満洲国を国際スポーツ界にデビューさせる以外に、東洋大会を開催する積極的な要因はなく、それこそが東洋大会が幻に終わった真の原因であったといえよう。

日満華大会は、様々な点で、戦時下の国際競技会を先取りする特徴を備えていた。極東大会や東洋大会と著しく異なるのは、政治が前面に出てきた点である。日満華大会は東亜新秩序を演出する場であり、スポーツは政治宣伝の道具となった。日本は盟主として特殊な地位を占め、競技会の形式も勝敗を競う「選手権」ではなく親睦を重視する「交驩」に改められた。参加国は日本に「本気」で挑戦するのではなく、自らがどれくらい日本に近づいたのかを確かめ、東亜新秩序の一員としての自らの位置を認識したのである。

武力によって中国を占領しつつあった日本にとって、もはやスポーツによって平和を演出し国際関係を改善する必要はなくなっていた。一方、あからさまな武力によって占領された大陸では、日本の侵略、支配を正当化する権威を必要としていた。日満華大会が大陸の日本人の熱意に押される形で開催されたのは、そのためであり、それは彼らにとって、「満洲国からの報国」であった<sup>178</sup>。しかし、日満華大会を「満洲国か

---

178 齋辰雄「満洲国からの報国」『陸上日本』第107号、1939年11月。

らの報国」と表現した齋辰雄自身は、大会に対する「一般の理解」が「低調」であり、「一般大衆の理解を無視して、この様な大会は成果を収め得るものではない」と指摘している<sup>179</sup>。結局のところ、日滿華大会は空回りに終わり、政治宣伝の面でも、競技の面でも、所期の効果を上げることができなかったのである。

11月7日、岸体育館に日本、滿洲国、フィリピンの代表が集まり、東洋体育協会臨時総会が開かれた。イランから東洋体育協会の解消が提案され、日滿両国に了承された。翌日、この三国に中国、タイ、ビルマの代表を加えて話し合いがもたれ、大東亜体育協会の設立が議決された。大東亜体育協会の誕生、そして大東亜会議に出席した各国首脳を迎えて開催された第14回明治神宮国民錬成大会は、戦時下スポーツの一つの到達点を示すものであった。それはある意味で、国内のスポーツ政策と、植民地・占領地のスポーツ政策との一致、別の言葉で言えば、植民地・占領地の皇民化を予示するものであった。この問題については、稿を改めて論じることにはしたい。

---

179 齋辰雄「滿洲代表選手の技術的な経過と戦績に就いて」『滿洲体育』6巻4号、1939年12月。